
続・月夜に贈ろう。

紅崎 夏妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・月夜に贈ろう。

【Nコード】

N1669J

【作者名】

紅崎 夏妃

【あらすじ】

どうしても、一緒になりたかった諒。彼は、親友の綾とデキ婚してしまった。それでも、彼とは、別れられない。そんな時、昔、付き合っていた瞬が現れた。瞬とは、妹の元彼という事で別れていた。

夢から覚めよう。(前書き)

「月夜に贈ろう」の続きです。

覚悟し、自分で決めた「別れ」一番、大切にしたい人を、冷たくする。その誤解は、とけるのか・・・。「いつか、空の上で、誤解を」ところ」一緒にいたい人と別れなきゃ、いけないなんて・・・。

夢から覚めよう。

月夜に贈ろうの続きです。

季節は、夏が、近づいていた。衣がえをした麻衣莉は、少し機嫌が悪かった。

「なんかさー。嫌なんだよね。この制服。」

「なんで？」

「だって、ありがちじゃん。このデザイン。」

不満気に、スカートを摘んで言った。

「そおかな？」

「お姉ちゃんはさー！」

麻衣莉は、すぐ、花梨と張り合う。

「私服だから、いいよね。お化粧もできるしさ。あたしも、早く、彼氏作って、お洒落したいな。」

「あれっ？彼氏いたんじゃないの？」

「別れた！ってか。浮気してたから。即。これ」

麻衣莉は、首を刎ねるマネをした。

「あいつさー。もてすぎんの。嫌になちゃう。」

「ふーん。」

「興味なさそうですね？」

「はい」

花梨は、正直に言った。同じ姉妹なのに、少し、地味な花梨に、比べ、妹の麻衣莉は、父親に似たのか、派手な顔立ちで、人目をひいた。いつも、姉の花梨は、引き立て役になっていた。化粧なんかして、それ以上、派手になって、どうしようというのだ？

「早く、彼氏つくんなきゃ！夏寂しいよー！」

「ほざけ！ほざけ！」

呆れて、花梨は、仕事に行く用意をした。今日も、あの彼は、女連れで、居るのだろうか……。妹の麻衣莉に聞けば、よかったと、思いながら、花梨は、コンビニに、寄る事を、思い出した。通販の支払いがあるのだ。

「彼にあえないじゃん。」

ぼそつと、呟いた。ささやかな楽しみ。遠くから、彼を見るのが、楽しみ。話す事があっても、高校生と22歳の花梨とでは、つりあわないが……。車は、駅近くの、コンビニへと、入っていった。車を止め、雑誌売り場でも、覗こうとした時、振向きざまに、誰かに、思いっきりぶつかった。

「すいません！」

反射的に、花梨は、誤った。

「あつ……。こつちが、悪いんで」

一見、悪っぽい高校生が、頭を下げた。顔を見るなり、
「あつ！」

花梨は、声をあげた。あんまり大声だったので、相手は、驚いた顔をして、後へと引いた。

「はい？」

「ああ……。いえ。すいません」

花梨は、赤くなった。あの男子高校生。その人だった。

「すいません。すいません。」

花梨は、恥ずかしくなり、用件も忘れ、コンビニから、あわてて、飛び出していった。

キスは、一瞬に。

こんなの、よくある話である。とにかく、花梨は、抜けている。妹の麻衣莉のほうが、しっかりしていると、よく言われる。それが、普通まら、気になるんだろうけど、花梨は、自分から、認めていた。抜けていると、いう事。仕事も、ぼーっと、している事が、多く、結構、自分で、あわてて、直す事が、目立っていた。だから、夕方の、配送の手伝いに、高校生のバイトを2、3名つけると、いわれた時、もの凄く、不安だった。自分に、人の上にたつ事が出来るのか？嫌で嫌でたまらなかった。

「いいなー！若い子達が、つくんでしょ？」

同僚の、綾に、冷やかされたが、花梨は、憂鬱そうに、答えた。

「替わろうか？」

「変わりたい。例え、3時間でも、嬉しい！」

「かなー。」

花梨は、打ち出した宛名の一覧を、ファイルし、これから、バイト達に、依頼する仕事の、最終チェックにうつっていた。

「替われるものならさー。これから、課長と、一緒に、顔合わせなの。もう・・・。憂鬱なんだ」

「ぼやくな。ぼやくな。」

席を離れ、渋谷、会議室に、向かっていった。課長が、先になって入り、花梨に、目配せした。

「今日から、配送の区分けを、お願いする。バイト生だ。よろしく頼むよ」

「はい」

顔を、あげて、花梨は、凝視したまま、かたまつた。3人ならんだ、一番奥に、立っているのは、見覚えがある。そう。顔が、かーっと、熱くなるのが、わかった。あの男子高校生だ。

「あつ。」

課長にさとられないように、顔を伏せた。1人ずつ、名前を紹介されたが、聞き取る余裕が、なかった。が、しっかり、あの高校生の名前だけは、聞いた。

「尾崎 瞬です。」

やはり。妹と同じ高校だった。瞬は、花梨と、目が合うと、にっこりと笑いかけ、頭を下げた。再び、花梨は、顔を赤く、染めるのだった。

「じゃあ、君達。彼女の後に、ついて行って。仕事の説明してもらって。」

容赦なく、課長は、言った。

「はい。」

高校生達は、指示に従い、花梨の、後について、階下へと降りていった。

・・・はあ・・・

心の中で、ため息を、つきながら、配送センターに、向かい、バイト達に、仕事の手順を、説明した。一通り、説明を、終え、事務所に、戻ろうとした時、瞬が、後から、追いかけてきた。

「あの・・・すみません。」

「はい？」

ダンボールが、所狭しと積み上げられている。花梨の、背丈以上の、箱が、視界を遮っていた。

「ちょっと、いいですか？」

「何？」

振り返る花梨の、顔めがけて、瞬が、覆いかぶさってきた。

「！」

花梨の、唇に瞬が、いきなり、キスをした。

「もらい！」

「！」

「お姉さん！タイプ！」

声をあげる間もなく、瞬は、走り去っていった。

「えー！ちよつと！」

信じられない事の、展開に、花梨は、ペタンと、尻餅をいつてしまった。

「なんちゅう！ガキ！」

花梨は、唇を、袖で、ぬぐうと、キッと消えていったダンボールの向こうを、にらみ付けた。

ありえない出逢い。

「なめられた……。完璧に」

花梨は、からかわれた事に気づいていた。次の日も。次の日も、無視してやった。自分が、気に入っていたのを、向こうは、感じていたに、違いない。コンビニでの、態度とか、みえみえだったもの。家に帰って、バイト君に、初日から、唇を、奪われた話をしたら、案の定、麻衣莉に、爆笑され

「お姉！からかわれたんだよ！」

と、言われてしまった。姉の面目丸つぶれである。

「だよね……。」

「かるーく。賭けられたんだね。」

「……。」

花梨は、シヨックであった。いつも、すれ違う憧れ君では、あったが、こんなに軽い男だったとは……。駅で、女の子を。連れて歩いているのを、何度かは、見ていたが、自分が対象になるなんて。

「全く、むかつく」

で、ある。妹と同じ年の高校生に、上手くやられてしまった。面白くない。今日も、用件は、全て、メモ書きか、綾に、任せて、ささと、帰る事にし、駐車場に、むかつた。

「あのさ！ねえねえ！」

追いかけてきた。

「何か用？」

「怒ってる？ひよつとして？」

「あつたりまえでしょ！」

「俺さー。あんま時間ないんだけど。」

瞬は、花梨と、車の間に、立ちはだかった。

「お姉さん。俺の事。よく見てたでしょ！」

「はあ？」

花梨は、顔が、かーっと熱くなるのを、感じた。

「朝。よく見てたでしょ！」

「・・・」

図星だ。

「ダチが、言ってたんだよね。」

笑うと可愛い。だが、今、そんな事を思ってる場合では、ない。

「コンビニで、あった時。逃げたでしょ！」

「はああ・・・」

やばい。ばれてる。いい年して、高校生を、追いかけてたなんて、
人事にばれたら・・・。

「本気です。俺。」

「はい？」

花梨は、危なく自分の、車に、よろめきそうになった。

「この車。目立つんですよ。たぶん、この会社の人じゃないかって。友達が、見てて。ミラーの所にかかってる、この飾り。」

瞬は、ミラーにかかってる、父親の海外土産の飾りを指差した。

「これって、運命つすよね！」

軽い瞬に、花梨は、軽い目眩を、覚えた。

「もー。そんな事言って、からかわないで、くれる？」

「は。冗談って、ばれました？」

「あなたね・・・。」

殴りそうに、なった。

「もう、忘れちゃいました？」

瞬が、急に真面目な顔をしたので、花梨は、ドキッとした。

「俺。中学の時、駅で、具合、悪くなった時があって、誰も、気づいてくれなくて・・・。あなただったと、思うんです。違ったら、失礼なんだけど」

花梨には、思い当たりがあった。高校3年の、冬。駅で、発熱したらしく、動けない中学生を、保護者に連絡し、自宅まで、送って行った事があった。あの時は、彼氏と一緒にだったが、今は、判れてし

まっただが・・・。

「あの時の、彼氏は、どうしたんですか？」

「大きなお世話よ。」

「良かった。俺。立候補します。ずーっと、探してたんです。似てた子と、付き合ったりしてたんですけど、やっぱ、ちがうなーって思ってた。」

「だからって、軽すぎ！」

「ですか？俺的には、ずーっと。思ってたんですけど。」

確かに、瞬は、花梨の、タイプだし、申し分ない美形である。だからと、いつて、社会人である自分が、高校生。しかも、バイト君と付き合うなんて、ありえない。

「だから。無理だっの！」

「ああ！休憩！終わりだ。じゃっ！考えておいてください！」
明るく笑うと、瞬は、立ち去っていた。

「ありえないっ！」

花梨は、しばらくエンジンもかけず、車の中にいた。

二人で、行こう！

とんでもない提案をするのは、決まって、綾だった。瞬を気にいつてしまったらしく、カラオケに行こうと言い出した。

「行つてきなよ」

花梨は、軽く、誘いを断つたが、結局、断りきれず、行く羽目になった。

「全く……。高校生相手なんだから……。」

花梨は、ぼやいたが、乗り気の綾の耳には、届かず、しつかり、行く事になった。

「……。って、どおいう事よ。」

なかなか、集合場所に、皆が現れず、最初に、顔をあわせたのは、何と、花梨と瞬になつてしまった。

「ねえ……。」

気まずい雰囲気になえかねて、瞬が、声をかけてきた。

「綾さんは？」

むつとしたまま、花梨は、答えた。

「一度、家に帰ったんだけど、渋滞にはまったみたいね。そちらの、お仲間？」

「向かつてるみたいだけど……。」

「そう。」

「……。」

「……。」

なんとも、気まずい。

「あのさ……。」

耐えかねたのは、瞬だった。

「この間の、話。本当だから。」

「かまわないで。子供が、大人をかまわないの！」

「子供じゃないよ。お姉さん。」

待ち合わせは、カラオケボックスの中である。二人きりで、緊張しているのに、ふいに、瞬は、隣に座った。

「本当に。俺……。」

「ちよつと!」

「俺が、怖いのか?」

「こ……。怖くないよ」

瞬は、花梨の顔を見据えた。

「5歳違うだけだよ。お姉さんが45歳だったら、俺は、40歳。かわらないでしょ。だから……」

瞬は、遊びなれてる感じもするが、本当は、とても、自分の気持ちに素直なんだと、思う。その時、その時の、気持ちを隠しきれない。今、瞬は、本当に、花梨と、一緒にいたいと、思っていた。

「お姉さん。キスして」

「お姉さんって、呼ばない事。それなら……。」

花梨は、この若さに、賭けてみても、いいと思い始めていた。キスぐらいならと。ほんの、軽い気持ちだった。瞬の、顔が、間近に見えた。なかば、自分の、方から、優しいキスを、した。……。つもりだったが、瞬は、初めて、花梨に、激しいキスを、求めた。駐車場で、初めて、交わしたキスとは、異なり、激しく、求め合うそれは、高校生のキスではなく、最早、恋人同士の熱いキスであった。

「花梨って、呼んでいい?」

「ん……。」

二人は、鼻先を、合わせていた。

「これから、ドライブ連れて行って」

「これから?」

花梨が、瞬を見ると、イタズラっぽく、笑った。

「二人で、夜景を、見に行こう!」

瞬の、提案に、花梨は、車の、キーを取り出し、エンジンを、かけた。後で、わかった事だが、他の、メンバーは、ほかの部屋で、二人が、来るのを、待っていった。

彼は、妹の元彼。

景色が、どんどん後に、飛んでゆく。瞬は、助手席で、快適そうに、ひっくりかえっていた。

「まずいよー!」

花梨は、言った。

「一応、未成年なんだから」

「いいじゃん。例えば、友達のお姉さんだったら、おかしくないでしょ!」

「そりゃあ!そうだけど」

瞬は、夜景が、見えるからと、言って、街中の中心にある山に、行くよう案内した。

「随分、詳しいのね」

「まあ。結構、行くからね」

「へえ・・・。」

花梨は、冷やかした。

「彼女、居るんだ」

「正確には、居た・・・かな」

車を、展望台に、停めると、瞬は、携帯を、取り出した。

「ずーっと、聞こうと、思っていたんだ」

「ああ!聞いちゃうの?」

「だって、俺達、もう、恋人同士じゃん」

「違うと、思うけど」

「不満ですか」

「とっても・・・。」

「肝心の、苗字聞いて中单ですけど・・・。」

瞬が、聞いた。

「藤沢 花梨」

「藤沢?」

顔色が、変わった。

「まさか……。麻衣莉って？」

「妹」

「あちゃ！」

瞬は、あわてた。

「ごめん。俺。降りる」

車のドアを、開けようとしたのを、あわてて、花梨は、引きとめた。

「どおいう事？」

「麻衣莉は……。俺の。そお……。」

「かわいい？」

「言っただじゃん。あなたに、似た子と、付き合った事あるって！」

「はあ！」

花梨は、車のドアを開けた。

「ちよつと！降りて！」

「いや……。まずいでしょ！」

「何、言ってるの？早く」

花梨は、瞬を、蹴落とそうとした。

「俺達、終わってるしい！」

「嫌よ！妹の元彼と、キスなんて！もう！最悪！」

「俺だって、まさかさー。」

「もう。もう。麻衣莉に、何言われるか……。」

「ちよつと、待って！何か言われるから、嫌なの？お姉さん？」

瞬は、怒ったようだ。

「俺の花梨に対する気持ちは、かわらないんだけど」

両腕を、つかまれた。

「探していたのは、花梨なんだけど」

また……。瞬に、キスされるのを、拒否できなかった。そのまま、瞬を、車外に、放り出す事も出来ず、ぼんやり、夜景を、見続けるのだった。

終わってないから！

その話をする時は、突然やってきた。どうしても、元彼とはいえ、妹には、言い出せない。なんとなく、気まずく、している空気を、麻衣莉が、やぶった。

「あのさ……。お姉ちゃん。話があるんだけど」

飲み物を冷蔵庫から、出そうとした時、麻衣莉が、立ちはだかった。
「なに？」

検討が、ついたけど、一応、気付かない振りをした。

「お姉ちゃんの会社に、今でも、バイト君いるの？」

「ああ……。いるけど。どうして？」

「その中に、うちの生徒。いるでしょ？」

「ううん。いるかな……。」

「那加居 瞬って、いる？」

「いた……。かな」

花梨は、少し、あっせっていた。麻衣莉に気付かれまいとすると、あきらかに、拳動不審になるのだ。

「彼。軽いでしょ？」

「そ……。そう？判らないけど。」

平然を装い、ペットボトルを、口にしながら、椅子に腰かけた。

「結構。もてるのよね……。あの子」

「そうみたいね。」

「会社のおばさん達。狙ってるでしょ？お姉ちゃんも、気をつけたほうがいいよ」

「……。う……。ん……。」

気もそぞろになった。

「……。って。まさか」

麻衣莉が、覗き込んだ。

「まさか……。。」

花梨は、後にひっくり返りそうになった。

「お姉ちゃん。嘘つけないでしょ。」

「ちょ．．．。ちよつと、待って。」

「お姉ちゃん。」

麻衣莉は、キツイ顔になった。

「瞬は、ダメ。あたし達。まだ、終わってないんだから。」

「なっ．．．。何も無いし．．．。あたし達。」

「そう。よね。まだ、終わってないの。本当。お姉ちゃん。瞬だけは、譲れないから。」

麻衣莉は、そのはつきりとした顔をきつくし、花梨を、睨み付けて言い放つのだった。

ここから、始まる。愛。

突然の恋敵出現。とは……。ライバルは、妹。でも、花梨は、本気で、瞬が好きなのは、疑問だった。とにかく、妹と、出逢ったばかりの瞬とでは、妹のほうが、大事。花梨は、教えてもらったばかりの瞬の携帯にメールする事にした。

・・・やはり、無理。つか、妹と、別れて無いじゃん！・・・返事は、すぐ、来た。

・・・それは、ない。麻衣莉とは、終わってる。・・・麻衣莉が、納得してない、別れなのか？

・・・だけど、あなたとは、続ける事は、できない・・・花梨は、送信すると、携帯を閉じた。何度か、着信を、知らせる音が、したが、無視し続けるうちに、もう、音が、しなくなっていた。「終わったの」

特に、メルアドを替えようとは、思わなかった。が、会社では、なるべく、綾に、バイト生の、管理を任せ、瞬とは、顔を合わせないように、過ごしていった。何度も、メールや着信が、あったが、花梨は、無視を続けた。自分の恋よりも、妹の気持ちをとった。今、なら、まだ間に合う。まだ、そんなに、瞬の事が、好きでは、なかった。

バイト生の、仕事も減り、今日で、最終日という日に、駐車場で待つ影があった。

「避けられているのは、判っていたけどさ・・・。」

寂しそうに、瞬は、言った。

「メールで、終わりなんて、お姉さんも、ひどい事するよね。」

「ごめん。やっぱり・・・。麻衣莉の事を、考えると・・・。」

「俺の気持ちは、どうでも、言い訳？」

麻衣莉は、答えなかった。

「まあ・・・。いいけどさ。そんなものだったんだな。」

花梨の隣に並んだ。

「まださ……。瞬君は、子供なんだよ。」

「子供？」

ちらつと、瞬の、瞳に、苛立ちが、はしった。

「いろいろ、判らないんだよ。現実って、ものが……。あたし達、非現実すぎると、思う」

「ふっ……。」

瞬は、笑った。

「お姉さんが、そう、思うんなら。」

「あたしさ……。」

話そうか、どうか、花梨は、ためらった。

「瞬君は、可愛いって、思ってた。だけど。好きな人は、他に居るの。ごめん。瞬君と、一緒の未来。想像できない」

きつい事を、言っていると、思う。だけど、実際、瞬との付き合いは、考えられないし、麻衣莉との関係は、傷つけたくない。

「ごめん」

「わかった。」

「麻衣莉を。お願い」

「それは、約束できないけど」

瞬は、花梨の手をとった。

「もう、一度だけ、キスさせて」

「だめだよ……。ここじゃ」

「じゃ。何処なら、いいの？」

「仕方ないな……。」

「家まで、送ってよ」

「最初で、最後ね」

花梨は、瞬を、車に、乗せた。最初で、最後の瞬の家までの、送り道。途中、瞬は、花梨に、軽くキスをした。

「また……。ね」

優しいキスだった。

「大人だつたら・・・断らなかつた？」

「ダメだよ。麻衣莉に、怒られる」

「また。それか・・・」

瞬は、笑った。花梨も、笑った。瞬17歳。花梨22歳の初夏だった。

時は、流れる。いつの間にか、花梨は、瞬の事も、忘れ、仕事、追われる日々に埋没していた。6年の月日は、花梨を、大人にし、妹の麻衣莉も、あでやかな女性へと、成長していた。

「全く、妹のほうが、先にいくとはね・・・」

母の、ボヤキが、また、始まった。今日は、麻衣莉の、結婚式であつた。あれから、結局、麻衣莉は、瞬と、付き合う訳でも、なく、全く別の男性と、結婚する事になっていた。23歳の、今時にしては、早い花嫁であつた。

「どうも、すみませんね」

花梨は、ふてくされて、みせた。

「結局、お姉ちゃん負けたわね。」

麻衣莉の友人達に、からかわれた。

「これからよ！」

花梨は、意地悪っぽく、笑った。

「そう、そう。お姉ちゃん。」

白無垢の麻衣莉が、向こう側を、指差した。

「以外な人。招待したんだけど。」

麻衣莉の指差す方には、黒い礼服に、身を包んだ男性が、立っていた。あの時より、身長は、伸びただろうか・・・。顔に、残っていた幼さは、消え、立派な青年が、こちらに、向かつて歩いていた。

「瞬君・・・？」

「お詫びって、訳じゃないの・・・」

麻衣莉は、隣の、旦那になる人物と、笑いあつた。

「彼の、お蔭で、私達は、知り合ったの。」

瞬が、キツカケで、麻衣莉は、今の旦那と、知り合ったらしい。祝詞を、読むべく、招待されたらしい。

「まあ……。いろいろ、あったからね」

麻衣莉は、花梨の背を、押した。

「もう、お姉ちゃんに、あげるから。彼。」

「そ。そんな勝手な。あたしにだって」

彼氏くらいいる。っと、言いたかったが、瞬が、目の前に、せまっていたので、言つのを、やめた。

「久しぶりです」

目の前に現れた瞬は、本当に、大人の男に、なっていた。瞬と花梨の、恋。まだ、二人は、始まったばかりである。

花梨の事情

「それで。その彼は、どうなったの？」

ベッドで、コーヒーを、飲みながら、諒は、聞いた。職場から、真っ直ぐ、来たという彼は、スーツにしわがつくのを、畏れ、ハンガーにかけた。しわが、つくと、奥さんに、勘ぐられるのが、面倒なのだ……。

「別に、どうって事無いけど……。」

花梨は、飲み終えたカップを、キッチンに置こうと、枕元にあったバスタオルうい、体に、巻きつけた。諒との、関係も、5年くらいになる。あの、瞬と、別れてから、知り合った。当初は、諒も、独身だったが、花梨とは、上手いかわず、別の女、綾と、デキ婚したのだ。別れても、職場が、同じというのは、難しいもので、諒と花梨は、不倫という形で、付き合う事になっていた。

「ただ……。懐かしいなー。ってか。その頃の自分がね」

「ふうん。」

「妬いてる？」

「別に。」

「誰かさんみたいに、突然、裏切って、他の女とデキ婚しまーす。なんて、事。あたしは、できないから」

花梨は、諒を、にらみつけた。

「あん時は、シヨックだったなー。6キロ痩せた。」

「また。それをいう。あいつが、積極的だったからさ」

……その時の、復讐で、あたしは、あなたと不倫関係をつづけているのかな……

花梨は、口には、出さなかったが、そう思った。諒が、時計を気にし、始めた。

「そろそろ帰る？」

今、花梨は、大人の女性らしく、一人暮らしをしているが、まだ、

諒が、花梨のマンションに泊まった事は、なかった。いつも、時間が、来ると、諒の顔は、幼稚園児の父親の顔になり、帰り仕度を始める。

「うん。時間を守らないと、この次、逢えなくなる。」

「そうね」

仕方なく、ハンガーから、諒の、スーツを手渡した。

「君は、この後、どうするの？」

「実家に、妹達が、来てるから、顔くらいだそうかと。」

「そう」

「別に、出るから」

「じゃ。また」

諒は、すばやく、着替えると、後ろを、振向く事なく、玄関に向かった。

「終わりにしようか？」

小さく、花梨は、呟いた。

「えっ？」

諒は、振向いた。

「もう、逢うの。やめよう」

ドアから、振向く、諒を、押し出し、花梨は、鍵をかけた。

「花梨」

「終わりだから」

諒も、それを、考えていたのか、抵抗は、なかった。ドアの前で、困惑する様子は、あったが、時間が、ないのか、すぐ、立ち去る気配が、あり、メールが、届いた。

・・・その話は、また。後で・・・

そう言つて、何度も、繰り返してる現実があるじゃないか・・・。

・・・終わりだよ・・・

花梨は、呟き、メールをうった。もう、こんな関係やめよう。ため息をつく、花梨の、脳裏に、瞬の、懐かしい笑顔が、浮かんでいた。

君と再会。

「お姉ちゃん。久しぶりでしょ？」

実家につくなり、妹の麻衣莉が、ひやかした。瞬が、来ていたのである。御礼も、かねて、久しぶりに飲もうという事になったらしいのだが、何か、照れくさかった。

「何年ぶり？お姉ちゃん達」

さも、何かあったでしようと言わんばかりの、麻衣莉の態度に、瞬が、あせっているのが、新鮮だった。

「本当。久しぶり。」

花梨は、瞬の隣に、座って、グラスにビールを、注いだ。

「へえ……。もう、お酒に飲めるんだ。」

「何言ってるんですか？もう、俺、23ですよ。」

花梨に、グラスをとるよう、瞬は、目で合図した。

「本当。俺。あの時は、子供だったから？」

「あの時って？」

麻衣莉が、邪魔した。

「やっぱりー。お姉ちゃんと瞬は、何かあったんだー！」

「何も。」

思わず、二人、声があってしまった。

「あら。怪しい。」

グイっと、麻衣莉は、一気に、飲み干した。

「べつにー。いいけど。あたしには、ヒロがいるから」

「だろー」

ラブラブな、麻衣莉とヒロ。花梨は、瞬に、興味が、あった。諒との、情事の後だと、いうのに。瞬と逢えると、思っただけで、胸が、高鳴った。

「今。瞬君は、一人なの？」

「まさか。」

瞬が、笑った時、一瞬、花梨は、傷ついた。

「だよね。」

「付き合ってる子ぐらいいますよ。」

「花梨さんは？」

「うーん。」

花梨は、答えようかと、迷った時、また、麻衣莉が、代わって答えた。

「イケナイ恋してまーす！」

両親が、席を外しているのを、見計らって、麻衣莉が、ちゃかした。

「ちょ！ちよつと」

花梨は、あせった。

「何とか、言つてよ。瞬。」

麻衣莉は、瞬に言った。

「あたしも、すこーし、責任感じてるんだ」

「そんな事・・・。」

嫌な事蒸し返すと。花梨は、思った。

「俺じゃ・・・。なんとも」

瞬は、言いながら、ふと、真面目な顔になった。

「イケナイ恋の方が、盛り上がりたりするんだよね」

「それ。経験の話？」

「いや・・・。」

瞬は、顔を伏せた。

「まあ・・・。年下の俺がいう事じゃないですけどね」

「ねえ。」

花梨は、思いついた。

「あたし達、付き合ってみない？」

突然の、申し出に、瞬は、おろか、麻衣莉夫妻も、驚いた。

「はあ？」

付き合ってる子が、居ると瞬は、言っただが。

「俺。彼女。いますよ！」

「いいよ。そんなの」

「花梨さん。かわりました・・・。」

「瞬君こそ。昔の強引さは、何処行つたの？」

「俺。大人になりましたから。誰かさんのお蔭で・・・。」

「じゃあ。本当に、大人になったか、試してあげる。」

酔つてきたのか、大胆な、花梨の態度に、麻衣莉も、驚いた。

「お姉ちゃん。飲みすぎだつてー。ピッチはやいんだもの。」

「かな・・・。」

・・・確かに。花梨は、そこで、ダウンしてしまった。

「やつぱり。」

麻衣莉は、やれやれと、いう顔をした。

「この人。お酒弱いよね。瞬。気にしないでね。」

タオルケットを、花梨にそつと、かけるのだった。

「お姉ちゃん。何か、いろいろ、あるみたいなんだ。瞬に言っても、

今更なんだけどね。」

「そうなんだ」

瞬の、花梨を、みる目が、何か、愛おしい目になっていた。

一つの恋が終わり。そして、始まる。

情けない状態を、みられたのは、その後、決定的な事になった。

酔いつぶれた後、瞬は、間もなくかえったらしいが、ずーっと、花梨に付き添っていたらしい。もっとも、それは、麻衣莉から、聞いた話だが、

「まんざらでも、ないと思うよ」

イタズラっぽく、麻衣莉は、笑っていた。その後、本当に、まずいと思った瞬間が、訪れた。

「話し合おう」

諒が、連絡してきた。どうしても、別れないという。自分は、花梨を、裏切り、同僚と結婚し、今、家庭を、裏切っているのに、今更、何をいうのか。花梨は、もう、この辺で、未来のない恋愛とやらに見切りをつけ、新たに直出したかった。このまま、関係を、続けても、未来はない。子供のいる諒に、一緒に、なって欲しいという勇氣もなかった。

・・・終わろう・・・

決心は、硬かったが、実際、話し合おうと逢っていた車の中で、大喧嘩になった。

「別れない。」

何度も、拒否する彼に、いい加減、花梨は、切れた。

「降りる。車を停めて！」

運転している諒の、腕をつかんだ。

「本当に、お願い。あたしの事を、思っているんなら、別れて。」

「俺は、できない。」

「もう、無理よ。本当に、思っているんなら、できるでしょう？」

諒の、顔色が、変わった。

「傷つかない内だよ・・・。諒。今なら、間に合う。」

「俺の気持ちか、覚悟できないんだ」

「子供の事を、思うの。お父さんが、こんな事してるの知ったら、かわいそうよ」

花梨は、諒をみた。綾は、嫌いだ。不幸せになれば、いいといつも思っていた。けど、最近、子供の事を、考える事が、多くなっていた。子供に、罪は、ない。幸せになる資格が、ある。それに、自分の、している事は、なんだろう……。いくら、大人の事情といつても、子供にとって、両親は、かけがえのないものだ。自分は、悪だ。よくない。

「おとうさん。なんだよ」

「……………」

諒は、近くのコンビニの駐車場に、車を、寄せた。花梨が、降りると、窓を開けた。

「花梨。それでも、俺は、花梨と、居たい。それは……。ダメなのか？」

答えられなかった。だから、手で、バツを作って、見せた。

「ダメなのか？」

頷いた。諒は、寂しそうな顔をした。

「ダメだよ。おとうさんなんだよ」

小さい声で、花梨は、言った。

「さよなら」

車は、走り出した。花梨は、背を向けた。知らないふりをした。見送らないつもりだった。いや……。正確には、諒に、見られなくなかったから。涙が、止まらなかった。涙だけでは、ない。嗚咽が、漏れた。とまらなかった。声を出して泣いた。本当は、諒が、好きだった。ずーっと、諒と、一緒に生きていけると、信じていた。二人、出会い。付き合ってから、何年も……。だのに、諒は、結婚した。自分を、裏切り、ほかの女と。それでも、諒は、花梨に逢いたいと言い、花梨も、逢いたいから、自分の気持ちに従い、逢っていた。でも……。何、一つ、変わらない。お互いの、気持ちだけが、便りの、恋愛だったが、もう、期限が、来ていた。新しく、人

生を、始める時期だ。子供に、父親を返そう。自分が、愛した人を、不実の、人にして、ならない。辛い。人目も、はばからず、泣いた。「・・・だから・・・」

誰かが、肩に触れた。

「終わって、良かったんだよ。」

振向いた。瞬だった。

「ごめん。声かけようと、思ったんだけど。」

恥ずかしい。走って、逃げようとした。

「待って！」

瞬が、手首を、つかんだ。

「そんな顔で、どうするの？」

くちや、くちやになった顔を、抱き寄せた。いつの間にか、瞬は、

あの時より、大きく、大人になっていた。

「どこから、見てたの？」

涙が、驚きで、しばらくとまった。

「揉めながら、降りてくる所から」

「話。聞いてたの？」

「ごめん。」

花梨から、鼻が、垂れそうになっていた。

「鼻。」

「えっ？」

「垂れそう。」

瞬が、ティッシュを、手渡すと人目もはばからず、思いつきり鼻をかんだ。

「ありえない。」

瞬は、笑った。それを、見て、花梨も、笑った。

「内緒ね。」

「誰に？」

瞬は、聞いた。

「妹に。」

「ああ・・・。言わないよ。あれが、不倫の彼との別れだなんて・・・。」

「ちょっと!」

花梨は、むっとした。

「冗談。冗談。もったいないよ。」

瞬は、コンビニの、袋を振り回した。

「綺麗なのにさ。不倫なんかしなくても、いくらでも、いるじゃん。」

「

「そう。言ってもね。」

「俺。なんて、どう?」

「はあ?彼女。居るくせに」

「まあ。」

瞬は、歩き出した。

「俺んち、近いの。とにかく、送って行くからさ。」

花梨の背を、押した。

「本当。どうするつもりだったの?こんな所で、降りてさ。」

「考えて、なかった。」

「ぼーっと。してるんだから」

「はい」

花梨は、黙った。

「暗くならない。」

瞬は、花梨の、手をとった。

「終わっただけ。また、次が、始まるんだよ」

優しい瞬の声だった。

「俺。待ってるからさ。」

「?」

花梨に、聞こえないよう小さく瞬は、言った。

「聞こえた?」

「聞こえない。」

「じゃあ。後で、言うからさ。」

瞬は、早足で、歩き始め、その後ろを、花梨は、小走りで、ついていった。

あの時に、戻ろう。

「別に、そういうつもりは、ないから」

花梨は、諒の、小さな車に、乗り込むと、そう言った。瞬は、駐車
場まで、来ると、

「車のキーを、取りに行くけど、一応、聞くけど、部屋に来る？」
と、聞いたのだ。花梨は、すぐ、わかったが、断った。

「瞬君も、結構、やるのね？」

「何か、勘違い、させた？」

瞬は、気づかないふりをした。

「俺は、お茶でも、って。思ったの」

「ふうん。」

「彼氏と、あんな、話を聞いていてさ。誘う俺って、何か、ひどく
ない？」

「まあ。狙う子は、いると、思うけど。」

瞬は、一瞬、エンジンをかけるのを、ためらった。

「誘ったら、付いてくる？」

花梨は、返答に困った。

「答えられないって、事は、否定でもないんだ。」

瞬は、花梨の顔を見た。

「前にさ……。カラオケ行ってくて、言つて、ドライブに連れて行
つてもらった事、あったよね？」

「あった……。ね。」

「あの時さ、俺が、何したかったか。わかる？」

瞬の手が、花梨の肩に触れた。

「俺。もう、子供じゃないから」

花梨の、唇に、瞬が、触れた。最初は、優しく。そして。熱く……。

「思い出した？」

瞬は、車のドアを、開けようとしていた。

「降りよう」

自分の、部屋へ、行こうと誘った。

「でも。」

花梨は、戸惑った。

「帰って、思い出して、また、泣くの？」

瞬の、言葉が、花梨の、気持ちを、決めた。花梨は、車のドアを、開けた。

「あの時に、戻ろう。」

瞬は、花梨の、腕を、掴むと、駐車場からの、エレベーターの、ボタンを、押していた。

支えて欲しい。

それから、どうした訳でもなかった。花梨は、休日の間、たまっていた仕事の山を、片付け終わり、コーヒーを、飲みながら、思わずぼーっとしていた。

・・・大人になっていた。・・・

当たり前だ。自分で、突っ込みを入れて、噴出した。6年も、たっているの、ある。全てに、おいて、瞬は、大人になり、経験を積んでるらしかった。瞬と、あの時に、戻ってしまった。だからと、言って、これから、瞬と、付き合うとか、そんな事は、考えてなかった。

・・・たぶん。自分は、あのまま、一人で、居たくなかっただけ。・

と。思ってる。瞬とは、付き合わない。勿論、諒とも。あれから、諒から、メールも、無かった。自分から、言い出した別れなのに、物凄く、諒に会いたかった。すぐ、返信してくれていたメールも、今はない。どんなに、小さな事でも、メールしていたのに、今、ない。来るメールは、セールの案内とか、妹からの、オノロケメールぐらいだった。

・・・瞬にでも、メールしようか・・・

でも、あんな事があった後だから、誤解されても、困る。第一、メルアドさえ、確認しなかった。

「聞いてる？花梨？」

同僚が、声をかけてきた。

「課長が、お呼びだけど。」

「課長が？」

「何か、したの？会議室に、来るようにって。一緒に、芳賀君も、呼ばれてたけど。」

「芳賀君が？」

花梨の顔色が、変わった。芳賀とは、芳賀諒の、名前である。同じ会社で、働いていたのである。そこで、花梨とも、知り合い、綾とも、知り合った。そして……。

「すぐ、行った方がいいと思う。」

それを、聞いて、花梨の足取りは、重くなった。

……もしかしたら……

予感が、当たらないように、祈りながら、花梨は、会議室のドアを開けた。

「失礼します。」

ドアを、開けると、正面に、課長の姿が、見えた。そして、その脇には、うなだれた様子の、諒の姿が、見えた。瞬間、花梨は、何の話か、理解できた。顔を、上げた諒が、花梨に、目で訴えてきた。

「まあ、かけなさい。」

課長は、花梨に言った。

「実は。こんな事を、私からは、言いたくなかったが、君も知つてと思うが、芳賀君の、奥さん。まあ、綾さんからなんだが、以前から、相談されててね。」

……ばれた……

花梨は、顔が、紅潮するのが、わかった。

「僕も、以前から、君達が、付き合っていたのは、知ってる。が、芳賀君は、綾さんと、結婚した。それは、わかるね？」

……言われなくても、判ってる……

もの凄い屈辱感に、花梨は、唇を噛んだ。そんな事、身を裂かれる思いで、別れたのだ。他人に言われたくない。

「まだ、続いていたのか？」

「いいえ。」

花梨は、きつぱりと言った。

「終わってます。」

諒は、首をふった。

「そうじゃないんだ。花梨。」

「離婚する事になった。」

諒は、言った。

「えっ？」

あんなに、別れないって、言ってたくせに。

「芳賀君達も、やつぱり、いろいろもめててね。綾さんに、相談されてた。子供の事を考えたら、別れない方がいい。が、」

「別れる事にしたんだ。花梨。」

諒は、花梨に、向き直った。

「もう、俺達は、だめなんだ。」

課長の目もはばからず、諒は、言った。

「ただ……。不倫が、原因で、別れたと、思われる。周りの、目を、無視する訳には、行かないんだ。」

「お話と、いうのは？」

花梨は、課長に、聞いた。

「綾さんの、希望というか、条件もあつてね……。移動して欲しいんだ。」

「私が？」

「芳賀君の、移動も考えたが……。」

「課長。私が、移動します。芳賀さんは、今後の、事もあるだろうし。」

「花梨……。」

諒が、思いつめた顔になった。

「私達、終わってるし……。だから、それが、お互いの為になるのなら。私が、移動します。」

「ごめん。」

諒は、小さく謝った。

「わかった。後で、連絡する。もう、戻って良いよ。」

目で、諒に合図すると、花梨は、会議室から、出て行った。別れた今頃、こんな事に、なるなんて。心の整理をつけて、やっと、別れたのに。今更、諒とやり直すなんて、出来ない。

・・・瞬に逢いたい・・・

花梨は、むしように、瞬に逢いたくなっていた。瞬に逢って、慰めて欲しい。そう、思っていた。

二人、寄りそおう。

「だからと、言つて、俺の所に來たの？」

ずーっと、アパートの前で、待つてた花梨をみつけた時は、嬉しそうな顔をした瞬だったが、理由を聞いて、少し不機嫌になった。

「ごめん。」

「メルアドを、聞く訳でもなくさ・・・。」

「ごめん」

「さつきから、謝つてばかり。コーヒーでも、飲む？」

瞬は、立ち上がり電気ポットの、コードを入れた。

「普段、そんなに、お茶なんか、飲まないからさ。」

カップを、二つ用意した。お揃いの柄の入ったカップだ。

「それつて、彼女の？」

「ああ・・・。」

花梨は、やっぱりつて、顔をしてしまった。

「元ね。」

顔を、読んだのか。瞬は、笑つた。

「別れたよ。随分、前にね。誰かさんの、痕跡が、強くてさ・・・。お砂糖は？」

「いらない。ブラックで」

「でさ。あんな事のあつた後、男一人の、部屋にきて、どうするつもり？」

「つて。どうしたいの？」

花梨は、とぼけた。

「まあ。いいんだけど。罪な人だなつて、思つてさ。」

瞬は、お湯をいれ、コーヒーを差し出した。

「俺つて、都合のいい男ですか？」

意地悪く、聞いた。

「そんなつもりないけど」

花梨は、下品に、コーヒーをすすった。

「一人に、なりたくないな・・・って、思ってた。」

瞬は、花梨の、座るソファアの、隣にそっと、腰掛けた。

「なんかさ。諒に、連絡しそうで、怖い。」

「もう、終わったんでしょ？」

「簡単に、終われるなら、とつくに、終わってるよ。ダメなんだ。

二人共。終われない。」

「だからってさ。」

切ない目を、瞬は、した。

「俺を、巻き込むの？」

「駄目？瞬。あたしの傍にいて、ほしい。」

「俺さ。諦め、悪いよ。何かあったら、あなたの事、許せないかもよ。」

「いいよ。許さなくて。瞬の、鼻先が、花梨の頭に、触れた。

・・・どうしよう・・・

今、自分は、深く考えず、瞬を求めている。それは、瞬を、傷つける事にならないか・・・。自分は、まだ、諒に、未練がある。でも、諒には、戻れない。

・・・このまま、瞬と、落ちてしまおうか。・・・

迷った花梨を、察したのか、瞬が、ぐっと、背中の手を廻した。

「もう、待てないから」

瞬の、柔らかい唇だった。

気持ちを、教えて。

諒は、何度も、花梨に、連絡を、とろうとしていた。花梨は、前は、違う部署に、代わり、勤務先も、諒のいる棟とは、全く別になった。花梨は、内心ほっとしては、いたが、未練が、ないかという、ない訳では、なかった。諒との時間は、長かった。いくら、瞬と、一緒にいても、時折、諒と、過ごした時間を、思い出した。・・・これでは、いけない・・・

そう、思っても、また、諒を、思い出してしまう。それを、埋めるように、瞬との時間を、もつのだった。逢えば、逢うほど、瞬の、花梨への、思いが強くなり、自分だけに、独占したいと、思いが、強くなっているのを、感じてしまう。瞬が、強く花梨を、思う程、花梨は、諒への思いとの間に、揺れた。

その日も、瞬の部屋にいる時、突然、花梨の携帯が、なった。

「携帯、なってる。」

「うん」

「出なきや。」

花梨は、手を伸ばそうとした。

「誰から？」

「うん・・・。諒かな」

「駄目。」

花梨の携帯を取り上げた。

「やめて」

「今は、俺といるの」

「でなきや」

「こつちが、優先」

瞬は、花梨の、顔に出せまった。

「大切な話があるの。」

「何の話。」

「鍵よ」

瞬の唇が、花梨を、塞ごうとしていた。

「鍵？部屋の？」

瞬の動きが、止まった。

「そう。まだ、返してくれないの。」

「俺が、出る。」

「駄目。」

瞬が、携帯に出ようとするのを、花梨あお、阻止しようとしたが、駄目だった。

「誰？」

瞬が、でてしまった。

「返して、欲しいって、いつてるんだよ。俺？そんなの、いいじゃん」

言うだけ、言うと、瞬は、携帯を切り、花梨に、投げつけた。

「何も、鍵かえれば、済むでしょ。俺が、手配するから。」

「区切りが、あるでしょ？」

「そういつて、逢ってたら、きりが、ないでしょ。あなたが、傷つただけでしょ。」

言うてから、瞬は、少し、考えて。

「俺じゃ、駄目なの？」

「そんな事言つてない」

「まだ、花梨は、迷ってるんだよね。」

瞬は、優しく、花梨を、抱き寄せた。

「俺、待たないよ。迷ってるなら、花梨を待ってた昔とは、違うんだ。」

「瞬」

瞬は、いつでも、自分を、待っていると、思ってた。

「待つだけなのは、もう、嫌なんだ」

「・・・」

「答えが、ほしい」

「・・・」

「花梨の、今の気持ちが、知りたい。」

いつも、一緒にいても、心が、諒に、傾いているのを、感じてしまった瞬間の、正直な気持ちだった。

兄を、獲られたくない。

花梨は、答えに、詰まった。瞬の事は、大切に思い始めてる。勿論、好きである。だが、どうしても、瞬との、生活していく自分が、想像できない。一緒にいて、安らぐし、逢いたいとも、思うが、ずっと、一緒に生きていく事が、想像できない。正直に、話すべきか。
「あのね。」

瞬の、真っ直ぐな目が、そこにあった。

「失いたくない人」

正直な気持ち。

「逢いたいつても、思う。」

瞬の、顔が、ほころんだ。本当に、そう思う。瞬と、いれば安心して、いられる。傷つく事もない。ただ、その分、ドキドキしたりとか、ときめく事も、あまりなかったが、それは、言えなかった。

「それは・・・。」

瞬は、興奮していた。

「ずっと、一緒に、いたって事？」

結果を、急ぐのか？

「花梨。俺とさ・・・。本気で、考えてくんない？」

「何を？」

「あのさ。」

瞬は、恥ずかしそうに、目を伏せた。

「結婚。前提」

「本気なの？」

「うん。ずっと。俺。花梨の事だけ、考えてた。」

「嘘でしょ。」

信じられなかった。こんな簡単に、プロポーズされる事が、あるなんて。あんなに、諒と、結婚したくても、結局、その台詞は、聞けなかった。

「信じられない。」

「信じていいんだ。俺、幸せにするから。」

「……」

「花梨。返事は、ゆっくりで、いいんだ。俺と一緒にいて」

突然の、プロポーズに、花梨は、動揺した。諒と、復活する事はないと、思う。が、心のどこかで、期待している。自分の中に、諒と、どうにか、なりたいという、願望が、あった。

「瞬。ありがとう。でも、少しだけ、考えさせて。だって、逢って、間もないのよ。あたし達」

とりあえず、時間が、欲しかった。

「いいよ。俺の今の気持ち、わかってくれるだけで。」

瞬は、微笑んだ。自分の、気持ちを、伝える事が、出来て、安心したようだ。

「うん。少しで、いいの。」

「うん。」

瞬は、優しく、花梨の肩を、だいた。窓の、外に、高層ビルの、ライトが、反射して、幾重にも、見えていた。

いつもの、とおり、花梨の帰りを、マンションの、下で、見送ると、ホールに、人影が、あった。

「お兄ちゃん。」

妹の、結亜だった。

「どうした？」

瞬は、妹の結亜に、向かい合った。まだ、高校生の、結亜は、塾の帰りらしく、重そうなバッグを、さげていた。

「遅くなったから、送ってもらいたくて。さっきから、携帯かけてるのに、出ないんだもの。」

結亜は、むくれた。瞬だけ、家族から、離れて、街の、中に、マンションを、借りている。妹の、結亜は、街の塾の、帰りが、遅くな

ると、よく、瞬に、送ってもらって、いた。

「ああ、ごめん。ちよつと、忙しくて。」

「さっきの、女の人……。お兄ちゃんの、新しい彼女？」

結亜は、花梨の、帰った先を、鋭い目で、睨んで言った。

「前から、思っていた人。」

瞬は、言った。

「そう。」

結亜は。その端整な、顔を凍りつかせて言った。

「続くと、良いわね。」

「なんだ、それ？」

苦笑いした。

「別に。」

「送っていくよ」

瞬は、妹の、背を押した。そう、妹。……。と、いつても、瞬の母親の再婚相手の、連れ子である妹であるが……。妹の結亜が、瞬に思いを、寄せているのは、誰の目にも、判っていた。わからないのは、瞬だけであつた。

やっぱり、忘れられない。

自分は、諒と別れる事が、出来るんだろうか……。

いつも、支えられていた。毎日、辛いことが、あると、諒にメールしていた。小さい事でも、報告し、返信は、すぐ、戻ってきた。諒は、なくては、ならない信じきった恋人でも、あったのに、花梨の、綾と、ただ一度だけ逢い、結婚する事になった。

……子供が、できたんだ……

申し訳なさそうに、諒は、言った。哀しかった。信じきっていた諒に、裏切られ、綾にも、裏切られ、そして、子供まで、出来てしまった事実、打ちのめされた。

……信じられない……

一度は、諒と、別れを決めた。だけど、やっぱり、諒への、思いは、強く、そして、綾を、同じ苦しみを、あじわせてやりたいと、いう思いもあった。諒は、誘うとあっさり、花梨へと、戻ってきた。……だが、もう、そう長く、関係を、続ける訳には、いくまい。子供を、犠牲には、できない。そして、自分の、若くは、ない人生も、ムダには、できない。報われない婚外恋愛。

……結果を、ださなくては……

……鍵は、俺が替える。……

瞬は、言ってくれたが、そうすぐは、無理だろう。アパートの、鍵を、開けようとすると、やはり、開いていた。

「やっぱり……」

花梨は、リビングの、ソファーに、腰かける諒の、姿を、みつけた。「早いよね。」

花梨は、バッグを、ソファーに、放り投げると、水を、飲もうと、キッチンに、入った。

「鍵を、返さなきゃって、最初は、思ったんだ。」

諒は、花梨の、後を追った。

「あの男は、誰？」

腕を掴んだ。

「彼」

「彼？」

諒の顔が、激しい嫉妬で、ゆがんでいた。

「前に、言ってたバイトで、来てた子？」

「そう」

「別れない」

諒は、花梨を、抱きしめた。

「嫌」

振りほどきたかった。

「もう。終わろう。決めたじゃない。ダメになる」

「ダメだ」

「最初に、裏切ったのは、諒だよ」

「だけど、もう。自由だ」

「ちがうでしょ！」

花梨は、諒を、押した。

「子供が、いるんだよ。もう、前みたいには、戻れない。」

「気持ちには、変らない」

「だめだよ」

花梨は、涙ぐんだ。

「もう、やめよう。お互い、そのほうが、幸せになれる。判って欲しい。」

「だめなのか？」

「帰って、ほしいの。あたしを、少しでも、思っていてくれるなら。」

諒は、黙った。諦めたように、テーブルに、鍵を、置き、花梨を、寂しそうに、見つめると、小さくため息を、つき、ドアをしめた。最後に、

「今でも、好きなんだ、花梨。俺。間違っていたと思う。ごめんな。」

「
そう、背中越しに、伝えた。」

「諒」

やっぱり。諒が、好き。瞬よりも……。でも、もう決めた事。今。
一つの、恋が、終わった。花梨は、声を、あげて、泣き出した。

……。諒が、好き……。。

その思いで、いっぱいだった。

彼を、永久に縛る方法。

想像は、果てしなく続いていた。今、彼は、何をしているのだろうか。とか……。どんな会話をし、どんな目で、彼女を、みつめ、抱き、そして……。想像は、キリがない。そては、以前。付き合つて、いた二人を知つて、いたから、想像は、リアルを、極めた。

……。耐えられない。もう……。

自分は、友人の恋人を、奪い、手に入れた。妊娠という、事実で、彼を縛り、手にいれた筈だけど、心まで、手に入れる事は、出来なかった。自分は、毎日、子育てに、終われ、年月は、彼女を、色あせさせ、普通の主婦と、何ら代わりがなかった。主婦で、いる事が、幸せなんだろうけど、いつも、自分の心には、一人の女性が、住み比べさせていた。

……。自分は、あの女より、綺麗なのか？輝いて、見られているのか？……。

それが、自分の価値。もう、夫と、関係を築けないと、わかった時、二度と、彼らが、逢えぬよう、手を打ちたいと思つた。自分が、居るから、隠れてでも、逢いたいんだろう……。もし、彼らの行為が、不幸な、人を、作つたと知つたら、逢う事を、続けるのだろうか。

……。とにかく、別れよう……。

綾は、思つた。二度と、花梨と諒を、逢わせたくない。自分達の行為が、不幸な、母子家庭を、作つたと知つたら、花梨は、どう思うんだろう。

……。花梨には、負けたくなかつた……。

どうにかして、手に入れた諒。でも、諒の中には、花梨が、住んでいた。消せなかつた。あの、二人を、二度と、逢わない事を、条件に別れる。

……。それで、いい……。

綾は、離婚届けに、サインして、諒に、郵送した。

・・・これで、自分の、プライドは、守れる。本当に？・・・
離婚したら、諒は、花梨と、再婚するんじゃないか？綾は、不安だった。ずーっと、諒と、一緒になってから。いつも、諒の、心の中が、知りたくて。でも、諒の中には、いつも、花梨の、影が、あつて。ぼんやり、時計を、みていた。

・・・また、諒は、花梨の、マンションに、いつているんだろう・・・
花梨の、よく、使っている香水の残り香が、諒の、体から、した。

ほんの、少しだが、その香りが、花梨の、姿を、浮かび上がらせる。

・・・花梨・・・

綾は、夫も、友も、失っていた。

・・・手元には、子供だけ。これから先。どう、生きていく？・・・

病院から、渡される薬も、次第に、増えていた。

・・・飲んでも、飲んでも、効かない気が、する。・・・

綾は、次第に、安定剤の、量が、増えていた。精神的に、追い詰められていた。

・・・少し、だけ・・・

眠れない時は、アルコールを、飲んだほうが、きく。綾は、アルコールと、安定剤を、服用してしまった。綾の、深い眠りにつく、傍で、無邪気に、幼子が、絵本を、読みふけていた。

心に負う深い傷。

その、恐ろしい知らせは、瞬の、耳にも、麻衣莉を、とおして、届いていた。

「花梨は……。」

瞬は、言葉を、失った。慌てて、麻衣莉に、言われた病院に、駆けつけると、細い管に、？がれた花梨の、細い体が、あった。

「大丈夫なの？」

傍に、付き添う麻衣莉に、瞬は、恐る恐る尋ねた。

「ようやく、落ち着いた所なの。」

青ざめた顔で、麻衣莉は、答えた。

「こんな事に、なるなんて……。」

麻衣莉の、目からは、悲しみとも、憎しみとも、とれる感情が、見て取れた。

「普通は、こんな仕打ちは、出来ない」

憎、憎しく吐き出した。

「姉貴の、彼氏を、奪つといて……。離婚した挙句。自殺。子供の前で……。姉貴に対する当てつけだわ。姉貴が、平気で、居られる訳が、ない。大変だったんだから……。。」

麻衣莉は、花梨の、腕をたくし上げた。

「姉貴……。死ぬんじゃないかと、思った。たまたま。届け物に、行ったから……。判ったけど。」

麻衣莉に、よると、たまたま、実家からの、届けものが、あるので、花梨の、マンションに居た所、諒から、連絡が、入り……。

「どうしよう。麻衣莉。諒から、電話があつたの」

花梨の顔から、血の気が、失せていた。

「警察から、電話があつたって」

「警察？」

「綾が……。諒の、元奥さんが、亡くなつたって。」

「どうして？子供が、いるんでしょう？」

花梨の、様子が、おかしくなっていた。両手が、震え始め、立っていられなくなった。極度の、ヒステリー状態だ。

「自殺したって。子供の前で。」

「！」

麻衣莉は、全身を、がくがく痙攣させ始める花梨を、抱きかかえた。

「あたしのせい？あたしのせいよね。」

「花梨！」

「あたしが・・・。」

嗚咽は、激しく、花梨は、体を、揺らした。

「あたしが、諒と、別れるのが、遅かったから！」

「違う！花梨は、悪くない！」

「いやー！こんなの。いや」

絶望と悲しみが、花梨を、襲っていた。激しい感情に、襲われ、もう、自分では、抑えられなくなっていた。

「姉貴！」

花梨は、麻衣莉の、両腕の中で、苦しめながら、もがき、そして、気を、失っていた。それが、病院に、運ばれるまでの、いきさつであつた。

「かなり、病院の、薬を、飲んでいたらしいけどね」

綾の、死因について、麻衣莉は、言った。今、諒は、いろいろ対応に、追われて、花梨の、様子を見には、これないで居るようだった。勿論、来ても、合せるつもりのない、麻衣莉では、あつたが、どうしても、これだけ、花梨が、苦しんでいる事を、諒に、知らせておく必要が、あると、思っていた。

・・・もう、完璧に、終わらせなければ・・・

それこそ、亡くなった綾の、望みどりのだが、そう、願わずに居られなかった。諒と花梨は、幸せになれない。誰もが、そう、思

っていた。

「そんな事が、あつたのか」

せつない顔で、瞬は、花梨を、見下ろしていた。

「花梨。もう、いいんだよ」

瞬は、花梨を、愛おしそうに、みつめていた。

傍にいるから。

ずっと、花梨の顔を見ていた。あれから、何があったのだろうか。

自分が、一緒にいれば、こんな思いをさせなかったのだろうか・・・

でも、花梨は、愛されるより、愛する事を、選び、そして、僕は、まだ、若く、非力だった。今なら、力になれるのだろうか。

瞬は、花梨の、顔を、飽きずに、ずっと、みていた。何の、力にも、なれないかもしれない。けど、傍にいる事で、目覚めた、彼女が、寂しがらずにすんだらと、思っていた。

「花梨・・・」

うつすらと、瞼が、開き、花梨は、ぼんやりと、天井を、見つめて
いるようだった。

「起きた？」

瞬の、問いに答えたのは、花梨の、目尻から、流れた涙だった。

「あたしさ・・・」

止まらなかった。手の甲で、涙を、拭っていた。

「酷い事してたんだよね。」

「花梨さ・・・」

瞬は、花梨を、覗き込んだ。

「本気だったんだろう？」

優しい声だった。

「俺さ・・・。わかんないんだけど、本気で、好きになったんだよね。嘘で、なかったたんだろう？」

「諒の事。好きだった。」

涙声だった。少し、聞き取れない声だったが、瞬は、その答えに、心が、ずきつとした。

「本気で、好きになったんだから、傷つく事だってあるよ。遊びじゃないんだから・・・。」

花梨は、声をあげずに、泣いていた。

「傷つかない、恋なんてないよ。花梨。答えはさ……。自分の中に、あるんだと思う。傷ついた時に、どうするか……。相手を、憎む気持ちだって、ある。だけどさー。一番は、自分の、好きになった人。大切だと、思った人だよ。幸せに、なってもらうのが、自分の、した事への、報いつてか、お礼だと、思わない？」

花梨は、黙ってた。

「相手が、どんな相手でもさ。元の、相手が幸せだって、思ってもらえば、いいじゃん」

「綾は、どうして、死んだの？」

「それは……。」

瞬は、言うべきか、迷った。

「思えない自分が、いたんだ。きつと。自分に、負けたんだよ……。。」

「キカツケは、あたし？」

「違うよ。自分で、選んだんだ。君から、彼を、奪った時から、始まっていたんだ。」

その時に、自分がいたら……。瞬は、心が、不安定に、なった。

「今はさ……。花梨。少し、休んだほうがいいよ。俺。傍にいるし。君のせいじゃ、ない。心が、病気だったんだ。」

少し、花梨は、落ち着いた表情を、見せた。

「そんな風に、考えたら、綾さんが、君の影みたいで、逆に、かわいそうになるよ。」

瞬は、花梨の、両腕を、布団の、中に入れた。

「俺が、いるから」

「瞬」

「俺は、大丈夫だから」

瞬の、手が、布団の、中に、滑り込んできた。

「そんな思い。絶対させないから。忘れるんだ。辛かった事、全て。」

花梨は、ゆっくり、微笑んだ。そして、まだ、薬が、効いているの

か、夢の、中へと、落ちていった。

「絶対。傍に居るから・・・。」

瞬は、花梨の、寝顔に、そう誓っていた。

君を巡る思いは、辛く。

もし、その場に自分が、いたら、それは、起こらなかったのだろうか……。いつも、推測してしまう。その場に、いなければ、わからない。自分が、傍にいない間に、花梨は、そんな思いをしていたのか……。諒という男と出会い、付き合った。しかし、綾という女性が、妊娠するという形で、別れたものの、秘かに、続けられた関係。綾は、死という形で、諒と花梨を、永遠に引き離れた。どんな思いで、花梨は、眠り続けているのだろう……。あの時、自分は、非力だった。でも、今なら……。

遠く、陽は、昇り、周りは、うつすらと、明るくなってきた。夜が、明けたのである。瞬は、一晩中、花梨に付き添っていた。花梨は、瞬の言葉に安心したのか、深い寝息をたてて、眠り続けていた。人を愛するのと、愛されるのは、どちらが、幸せなんだろう。瞬は、花梨を、ずーっと、思い続けていた。花梨と別れてから、年頃の男の子が、そうであるように、いろんな女の子と、付き合ってきた。たぶん、それなりに、愛してきたと思う。でも、それは、一度、胸に染み付いた花梨への果たせなかつた思いには、かなわなかった。……忘れられない……。

それは、瞬の心の中に、つきまとう。呪縛。

……。今度こそ……。

自分は、花梨を、幸せにしたい。瞬は、思い、誓っていた。窓から、差す光が、花梨の横顔を、映し出していた。ずーっと、恋焦がれていた人は、苦しい胸の内にいる。せめて、枕元の、花でも、活けてあげようと、瞬は、立ち上がろうとした、その時。ドアが、音をたてた。

「！」

一目見て、瞬は、それが、誰か、わかってしまった。

「！」

相手も、瞬が、花梨と、どういう間なのか、わかったようだ。瞬は、一瞬、花梨が、寝入っているのを、確認すると、あわてて、ドアを、押しやった。

「すみません。ちょっと、外へ」

相手は、瞬に、言われて、状況を、理解した。

「・・・」

相手は、すぐ、瞬に、言われるがまま、廊下へ、出た。顔色の悪い、冴えないサラリーマンに、見えた。

「諒さんですね」

事情を、聞かれに行った足で、真っ直ぐ、花梨のいる病院に、向かってきたのだろう。疲れた顔をしていた。瞬は、諒に逢ったら、言いたいと、思っていたことが、たくさんあった。しかし、こうして、疲れた冴えない男を、前にして、瞬は、何を、言うべきか、言い出せなくなってしまった。

「花梨の・・・」

先に、諒が、言いかけた。花梨の彼とでも、言いたかったのだろうか。

「はい。お付き合いさせていた দিয়েます。」

勝ち誇った気持ちで、瞬は、言った。

「ああ・・・。そうだったのか」

少し、寂しい表情を、諒は、した。

「・・・何て、寂しい顔をするんだ・・・」

瞬は、思った。諒の、たぶん、以前は、綺麗だったであろう顔は、今は、やつれ冴えない顔になっているが、寂しそうな憂いのある表情は、男である瞬からみても、ぞっと、する色気があった。花梨が、好きになり、愛した男。

「僕は、マズイ所にきてしまったようだね」

諒は、瞬に言った。

「綾の事で、花梨に何かあったらと思って」

花梨と、呼び捨てだった。少し、瞬の、心に小波が、立った。

「俺が、ついてますから」

瞬は、呼び捨ての、諒に対抗した。

「それより、奥様は、どうしたんですか？」
嫌味だ。

「元。だけどね。」

諒は、否定し、笑った。

「事故だった。元々、安定剤を、飲んでいてね。深酒を、し過ぎた上で、薬を、飲んでしまったらしい。事故だ」

事故。と、何度も、諒は、言った。

「花梨が、勘違いして、何かしでかしては……。と、思って。」

諒は、いかに、自分が、花梨を、思っているか、瞬に、言ってるように、聞こえた。

「ほんと。心配いらないます。俺が、いるんで」

瞬は、言った。早く、帰ってほしい。

「花梨は、俺がみます。だから、大丈夫です」

「君が？」

諒は、瞬を、凝視した。

「無理だよ。君は、一度、花梨と、別れてる。君には、荷が、重いよ」

瞬は、むっとした。

「あなたに、言われたくない。お子さんだって、いるんでしょう？一度、花梨を、捨てといて。よく、言えますね」

怒りが込み上げてきた。

「事情が、あったんだ。花梨を、結果的に、傷つけた。」

諒は、引かなかった。自分の、花梨への、愛情は、否定しなかった。「花梨を、思ってる。その気持ちは、変らない。」

「だから、奥様は、命をたった。あなたの、無責任な思いは、また、花梨を、傷つけた。更に、深くね！」

とにかく、花梨が、目を覚ます前に、帰したい。
「帰ってください」

瞬は、ドアの前に、立ちはだかった。

「逢ってほしくない！」

「それは、花梨が、決めること」

諒は、無理矢理、瞬を、押しつけ、ドアを、開けて入ろうとした。

「ちょっと！」

瞬は、引きとめようとしたが、諒は、ドアを、開けてしまった。

「花梨！」

気づけと、言わんばかりに、声を、かけた。

「僕だ！」

諒の声に、反応するかのように、花梨は、目を、見開いていた。真っ直ぐな目が、天井を、見ていた。

「・・・諒？・・・」

忘れていた筈の、懐かしい声が、花梨の、深く眠っていた意識を、揺り起こした。

「諒！」

花梨の、黒めがちな瞳が、大きく広がり、涙が、目尻から、すっと、落ちていった。ほんの、一筋、今まで、心に、秘めていた思いを、告げるかのように、流れ落ち、諒への、思いが、よみがえってきてしまった。

「花梨」

その涙に、応えるかのように、諒は、ベッドの脇に駆け寄っていた。

「事故なんだよ。花梨。君のせいじゃないんだ」

諒は、花梨の手をとった。

「僕が、悪いんだ。花梨」

手を、握り、諒は、ひざまずいた。目を、伏せる諒は、いつしか、涙を、こぼしていた。

「辛い思いばかりさせた・・・」

花梨は、諒を、見ていた。暖かい目だ。その目は、諒を、思っている事を、告げていた。

「諒。顔色悪い。」

愛おしく諒を、みつめる花梨を、瞬は、遠くみていた。黙って、ドアの前から。そんなに、離れて距離では、ないのに、瞬には、遙か遠く、感じた。

・・・花梨・・・

帰るのは、自分だ。瞬は、思った。二人の間に、自分のはいる隙はない。瞬は、そっと、ドアを、開いた。

「花梨。」

ふりかえった。自分を、追いかける視線もない。

・・・さよなら・・・

瞬は、静かに、ドアを閉めた。

瞬を一番愛する者。

運命とか、そんな言葉は、信じてはいない。とは、言っても、それらを、感じられずにいられない事がある。例えば、どうしても、結ばれない相手と、出掛ける時に限って、雨が降るとか、体調を崩してしまうとか……。そんな時は、この人とは、居ちゃいけないと思ってしまう事が、ある筈だ。瞬も、そう、思わずに居られなかった。自分の、花梨へ捧げる気持ちに、変わりはないが、花梨の、気持ちが見えてこなかった。花梨にとって、瞬は、一番ではないのだ。

「お兄ちゃん？」

瞬は、真っ直ぐ、花梨の、病院から、戻ると、マンションの、入り口に、立っていたのは、結亜だった。

「どうしたの？こんな早くから。」

瞬は、兄らしく義妹を、叱った。

「だって。ずーっと、メールしても、返事ないから……。心配で。」

「部屋の、鍵は、持っているの、瞬の、帰りを、部屋で待っていたが、返信がないので、兄の身を、案じ、部屋と、エントランスを、行ったり来たりしていたようだ。」

「どこ？いつてたの？」

責める目で、結亜は、兄に聞いた。

「病院。」

イラ立つのを、抑えながら、瞬は、エレベーターホールに、向かった。

「どうして？あの人と一緒にだったの？」

まるで、妻だ。

「そうだよ」

瞬は、否定しなかった。結亜は、妹だ。血は、？がっていなくとも、

自分は、そう思っている。それ以上でも、以下でもない。

「私……。嫌だな。」

「何が？」

瞬は、振り返った。

「あの人。」

「どうして？お前には、関係ないじゃん」

「お兄ちゃん。不幸になる」

瞬の顔色が変わった。振り返り、震える声で聞いた。

「何、言ってるの？」

結亜は、思いつめていた。

「嫌なの。あたし。お兄ちゃんが、女の人というの。見ていたくないの。だって」

結亜は、瞬に飛びついた。

「お兄ちゃん。好きなの。小さい時から、初めて、逢った時から」

勢いあまって、瞬の体は、後ろへ、のけぞりそうになった。結亜は、瞬の首に、腕を、からめ、その勢いのまま、瞬の、唇に、重ねてきた。

「！」

瞬は、かわそうとしたが、結亜の、真剣さと、涙を堪えてる様子に、築き、力を、緩めた。

「結亜」

結亜に、されるまま、だった。結亜の長い睫から、かすかに、涙が、滲んでいた。

「ずっと。好きだったの」

ようやく、離れた唇から、でた言葉だった。

「お兄ちゃん。気づいてくれないんだもん」

瞬は、優しく、結亜の背を撫でた。

「結亜。俺達……。兄妹だから……。」

そう聞くと、結亜は、興奮した。

「血は、？がっていないもん」

「結亜！」

「ずっと。お兄ちゃんを見てきた。あたしは、一番、お兄ちゃんの事を、知っている。一番理解できる。お兄ちゃんを、幸せに出来る」

「だけど・・・。」

瞬は、言葉を搜した。

「まだ・・・。早いよ。結亜。」

今、自分は、傷ついてる。きっと、誰かが、自分への、熱い思いを、口に出したら、揺らいでしまうほど、傷ついていた。だが・・・。結亜だけは、だめだ。

「まだ・・・。」

そういう事で、結亜への、答えを、伸ばす瞬だった。

・・・花梨・・・

こんなに、長く深く思っているのは、花梨だけなのに、やはり、彼女とは、一緒に居られないのか。

「お兄ちゃん。」

再度、しがみついて来る結亜を、瞬は、拒まなかった。

今更の恋。

目の前には、諒が立っていた。一日だって、離れていると、辛くて逢いたくて、逢いたくて……。綾と、結婚すると、聞いた時のシヨックは、言うに耐えなかった。生きていく気力を、失った。恋人と、友人の両方を、同時に失い、食事も、のどを通らず、夜も、眠れなかった。立ち直れたのは、ある友人の、ほんの一言

「結婚が、終わりでないでしょ」

だった。不倫。結婚が、終着駅では、ない。本当に、気持ちに、拘るのなら、結婚という終わりを、選ぶのではなく、永遠の、心の？がりを、求めよう。花梨は、諒と、心で、つながりたいと思った。だが、やはり、ふとした瞬間、瞬間に、諒の影に、綾や、その家庭の姿が、見え隠れし、花梨は、終わりの無い嫉妬の炎に、苦しんだ。時間も過ぎていく。女の、いい時期を、不倫という恋愛に、時間を労していくのには、あまりに、花梨は、可愛そうすぎた。

……。もう、終わりにしよう……

逢うたび、帰り道に、花梨は、思った。逢えば、楽しさから、忘れてしまうが、やはり、諒の家庭に与える影響や、花梨自身の、将来を考えると、別れと、いう結論が、ついてくる。結果、花梨の不倫は、一番、畏れていた結果を、生んでしまった。

……。死……

綾の死と、いう現実あり、重かった。もう、自分は、人として、許されるものなのだろうか……。

今、目の前にいるのは、自分と同罪の罪を、背負う相手……。

「諒……」

諒は、変わらない笑顔で、応えた。

「事故だったんだよ」

君のせいじゃない。とでも、いいたいのか……。諒は、花梨の手をとった。

「花梨……。綾は、薬の扱いを間違えた。事故なんだ」

「そうなの。でも……」

死んでしまった事実は、変わらない。そして、自分の不実さも。

「諒。もう、逢わないって、決めたのよね」

「そうだったね。でも、これだけは、知らせなきゃと……。」

「あたし達が、追い詰めたとしたか、あたしには、思えない」

「……」

諒は、応えなかった。花梨は、諒を見た。諒が、いてくれたのは、嬉しい。が。今、逢いたいのは、諒じゃなかった。

「瞬は？瞬は、いままで、ここにいたのに！」

瞬が、居ない。朦朧とする意識の中で、確かに聞いた瞬の声。

「……ここに、いるから……」

そう言ったのに、瞬の姿は、どこにも、なかった。

「どこに、いるの？」

すぐるような目で、花梨は、諒を見た。

「ああ……。さっき、出ていたよ……。」

ああ……。瞬は、諒が、来て、誤解してしまったまま、出て行ってしまったのを、花梨は、理解した。

「早く、追いかけてきや！」

花梨は、立とうとしたが、そう、すぐには、無理だった。

「花梨。今、すぐは、無理だよ」

「瞬が、誤解してる。早く、誤解を、とかないと！」

諒は、花梨が、瞬を、自分以上に、思っているのを、感じた。

「花梨！」

諒は、花梨を、抱きしめた。

「僕は、もう、駄目なのか？」

「諒！」

「もう、間に合わないのか？」

「だって！」

抱きしめる諒の両腕を、花梨は、振りほどこうとしたが、それ以上

に、強く、諒は、花梨を、抱きしめた。

「だって。あなたとは、一緒になれないもの。」

諒の、力あり、強く、逆らう事は、出来なかった。

別れを決めた朝。

「やっぱり、帰った方がいいよ」

瞬は、帰ろうとしない結亜に言った。結亜は、あのまま、瞬の部屋にいた。一度、男女を意識してしまったら、兄妹といえ、同じ屋根の下には、いられない。

「結亜。父さんも、母さんも、心配するから・・・」

「心配しないのは、兄さん・・・。瞬が、良く、しっているでしょう」

結亜は、兄さんといいかけて、言葉を選びなおした。

「ここに、いたい」

「ダメだよ。結亜。さっきは、ごめん」

「どうして、ごめんなんて言うの？」

結亜は、怖い顔で、瞬を睨んだ。

「あたしは、瞬が、ずーっと、好きだった。それに、応えてくれたんじゃないの？ やっと、思いが、届いたと思ったのに・・・。」

結亜は、そうだ。いつも、欲しいものは、手に入れてた。今回も、

瞬を、手に入れようとしていた。近くにいて、手の届かない人・・・。

。義理の兄。いつも、優しく、自分の一番の理解者。それを、奪われるのは、耐え難い事だった。

「結亜は、大切だよ。ずーっとね。だけど、兄妹以上には、なれないんだ。判るね？」

「本当の、兄妹で、ないのよ」

「だけど、俺には、それ以上には、見えないんだ」

「瞬・・・。」

「わかってくれるね？」

「わかりたくない」

結亜は、かぶりを、ふった。

「瞬は、盗られたくない。ここから、出て欲しいって、言うなら、出て行く。けど、家には、帰らない」

「困るなよ」

「適当に、泊めてくれる人、探すんだから」

「結亜。」

「瞬」

瞬は、根負けした。

「いいよ。ここに居て。だけど、出来るだけ、大人しくしてほしい」
「出来るだけでいいのね。」

結亜は、意地悪く、笑った。結亜は、必ず、花梨との事も、邪魔してくるだろう。でも、それは、これから、どうなるか、わからない。きっと、今頃、あの人は、諒という人と一緒に、過ごして居るのだろうから……。ふっと、胸の辺りが、痛んだ。何度も、諦めようとした人。手に届きそうになると、また、手の届かない所へ、行ってしまう。

・・・今度は、本当に、忘れてしまおうか・・・
忘却。全て、忘れる。そうすれば、もう、苦しむ事もなく、胸を焦がす事もない。全て、忘れて、新しい恋に、身を任せてみるのも、いいのではないか・・・。

瞬は、ベランダに出た。隣の小学校の体育館から、登校してきた子供達の声が、響いてきた。何の変わりも無い日常。この淡い光の中、自分の一つの恋が、終わった。瞬は、花梨は、自分から、離れていくと、確信していた。

「諒」

あの、諒を、みつめる花梨の顔を、今も忘れられない。花梨は、諒を、今も、愛している。そこに、自分が、割り込む隙が、ない事を、感じていた。

・・・病院に、戻ろうか・・・
そう、思ったが、すぐ、その思いを、打ち消した。

・・・もう、自分から、花梨に逢いに行くのは、やめよう。・・・
彼女に、触れるのは、やめよう。そう思った、切ない朝だった。

互いに、みつめるもの。

「だいじょうぶよね」

妹の、麻衣莉達が、病院の会計を済ませると、花梨に、声をかけた。
「ん．．．。」

花梨は、気のない返事をした。

「結局、瞬は、あれから、一度も、こなかったの？」

麻衣莉の、質問に、花梨は、答えなかった。あれから、瞬は、姿を見せなかった。諒は、花梨と、？がりがったが、もう、そんな気には、なれなかった。諒の、後ろに、みえるものは、花梨を、更に、不幸に、陥れるものばかりだった。純粹に、諒への、愛情だけを、考えていられる程、諒も、花梨も、若くなかった。諒に、病室で、抱きしめられた時、一番、恋しかったのは、瞬だった。綾が、亡くなった時に、諒への、思いは、封印されてしまったのだろう．．．。それとも、もう、諒への愛情は、とくに、終わっており、ただ、未練だけが、亡霊のごとく、つづいていただけなのか．．．。瞬は、こなかった。

「瞬に、メールしたりしなかったの？」

瞬は、麻衣莉の、元恋人でもある。

「あたしから、言おうか？」

「別にいい」

花梨は、不機嫌に、車に、乗り込んだ。

「もう、いいんだ」

．．．諒とも、終わり。瞬とも．．．。終わろうか．．．。

「お姉ちゃん！そんな、迎えに、こなかったからって！」

「いいの。考えてたんだ。」

麻衣莉は、花梨の、隣に、座った。

「瞬とも、うまくいかない。何か．．．。怖いんだ」

「どうして？」

「きっと、あたしの、恋は、上手くいかない」

「諒との事が、そうだったからって、決まってる訳ないじゃない」

「こわいの」

いつも、昔から、花梨と、麻衣莉の、立場は、逆転する……。

「こわい……。本気になった途端に、失って、しまうのが……。

」

「姉ちゃん……。瞬は、そんな人じゃないよ。」

「でも。」

深く傷ついていた。本気で、諒を愛し、そして、その思いが、一つの、家庭を壊し、命を、奪い……。幼子から、母を、奪った。

「もう、少し、一人でいたい……。」

「そうなの？」

「……。」

嘘だ。麻衣莉は、思った。今、瞬が、現れたら、瞬が、花梨に、変わりない愛を、伝えれば、この不安は、消えるのに……。今、花梨は、不安定になっている。

「花梨……。」

麻衣莉は、姉である花梨の、右手を、優しく擦るのであった。

「お兄ちゃん。外にでも、出てみたら。」

ずーっと、出窓に、座り、外を、眺めている瞬に、結亜は、声をかけた。あれから、結亜は、瞬の、マンションに、いついていた。

「いいよ。」

瞬は、何も、やる気が、でなかった。本当は、花梨に、逢いに行きたい。行きたい気持ちを、抑えようと、他の事に、取り掛かろうとするが、心が、飛んでしまい、する事が、全て、疎かになってしまう。何を、やっても、集中できず、気が、ソゾロに、なってしまう。……逢いたい。花梨に……。

逢いに行くのは、簡単である。だが、逢って、また、諒との、間を、見せ付けられるのが、辛かった。

花梨が、諒を、愛おしそうに、みつめるのが、辛い……。

「何する気も、ないんだ。」

ぼーっと、窓から、階下を、見下ろしていた。携帯を、何度、みつめても、花梨からの、メールを知らせるメッセージは、なかった。

「瞬」

結亜は、瞬を、後ろから、抱きしめた。

「あたしじゃ……。だめなの」

「ごめん」

瞬は、うなだれた。

「お前は、妹でしか、ないんだ」

「あたしは、お兄ちゃんって、みてないのに……。」

結亜の、優しい額が、触れた。

「傍に、いてほしいのに」

「傍に、いる事は、できるよ。ただし……。兄としてね」

結亜の、白い顔を、撫でた。

「大切な妹なんだ」

「嫌なの」

瞬の手を、結亜は、振り払った。

「妹は、嫌なの」

結亜は、叫んだ。

「あたしだけを、みてほしいの」

「ごめん」

瞬は、ふたたび、遠くを、みつめるだけだった。

姉を、愛してる。

時間だけが、経って言った。花梨は、不安定な為、実家に、身を置き、時々、麻衣莉が、様子を、見に行っていた。そして、瞬も、変わらず、結亜と、暮らしていた。時間だけが、経っていった。お互いに、逢いたいと、刹那に、思っていたが、これ以上、逢ってしまった所で、お互いを、傷つける事にしかならないと、花梨は、瞬と諒を避け、瞬は、花梨には、触れないように、時間が経つのを、静かに待っていた。そんなある日、麻衣莉が、深刻な顔で、言ってきた。

「あのさ……。変な噂聞いたんだけど。」

ちよつと、迷いながら、話すかどうか、ためらっている様だ。

「はつきり、見たわけでないんだ」

「何？」

休日の、午後である、実家に顔を出した麻衣莉は、土産らしきケーキを、持ったまま、部屋に入ると、そう切り出した。

「お姉ちゃんは、瞬と、どうなったの？」

「えっ？」

花梨の、顔色が、変わった。明らかに、意識している顔だ。

「どうって……」

忘れたいが……。忘れられない。心にしみついた影。それは、諒よりも、濃くなりつつあった。

「何も、連絡は、ないわ。かといって、こちらから、しようという勇氣は、ないの。」

「どうして？」

「……」

麻衣莉は、花梨に、詰め寄った。

「いいの？昔、諒さんを、盗られた時、後悔したんでしょう？このまま、瞬が、盗られてもいいの？」

「どういう事？」

麻衣莉は、ため息を、ついた。

「瞬が、女の子と、住んでるのを、見たって、友達が、いて」

「妹さんでしょ？妹が、いるって、言ってた」

「バカね……。本当、どうして、そう、お人よしなの？」

バカと、言われて、花梨は、むっと、した。

「血が、？がってないの。知らなかったの？」

「えっ……。？それは、聞いてない」

「でしょうね。男は、都合の悪い事は、話さないから……。」

花梨は、黙った。

「決めないだよ……。お姉ちゃん。瞬が、好きなら、大切なら、

何、遠慮してるの？」

「だって……。」

「だって？何が、怖いの？諒さん盗られた時だって、取り返せば良かったんだよ！あの時、諒さんだって、苦しんだはず。お姉ちゃんが、それでも、別れたくないって、言えば、一緒に居られたんだよ！」

「だって、綾の、おなかには、赤ちゃんが……。」

「それは、お姉ちゃんが、決める事では、ないよ！」

「そんな……。今頃……。」

「今だから、言うの。お姉ちゃんは、自分の気持ちを、伝えてない！全然！自分の、気持ちを、伝えるの！あとは、相手が、考えるから。そして、二人で、考えるの。」

「麻衣莉」

花梨の、両目から、涙が、零れ落ちた。

「遅くないから……。」

麻衣莉は、花梨の、肩を抱いた。

「もう、お姉ちゃん。泣くの。見たくないよ……。」

「ごめん」

花梨が、クスンと、鼻を、吸った。

別れの序曲。

・・・瞬と、連絡をとりたい。

いつも、そう思っていた。だけど、逢えば、傷つけあう……。そうして、お互いに、愛し合っているのに、お互いの気持ちを、探りあい、すれ違ってしまふのだろう。自分の中で、諦めが、先になり、傷つかないように、先回りしてしまう。

・・・本当は、好きなの。・・・

眠る前は、瞬との、思い出を、復習する……。あの時、こうすれば、良かったとか……。自分は、今の、瞬では、なく、思い出の中の、瞬に、恋していると、思っていた。

・・・でも、本当は、瞬に逢いたい……。。

逢いたいと、思える時に、逢える。それが、幸せな事。

「瞬？」

花梨は、勇気を、出して、電話してみた。

・・・でない……。。

コール音は、するものの、電話にでない。

「瞬」

願うような気持ちで、何度も、かけた。

だが……。でない。携帯だったら、着信履歴が、残るはず、そうしたら、きつと、きつと、電話を、くれるはず。少しだけ、電話がかかっているのを、待つ事にした。

きつと、人と人は、すれ違う事が、多い。特に、逢いたい人とは……。うまくいかない。もし、危機にあった二人が、そこで、逢えば、そのまま、二人は、結ばれるのだろう……。運命を感じて……。だけど、どうしても、すれちがう二人は……。。

瞬は、花梨に、連絡を、とりたいと、思っていた。だが、諒の影

を、花梨から、感じているうちに、病院で、諒と、花梨の、姿を、見てからは、自分から、連絡を、とろうと、行動を、起す気に、なれなかった。

「ねえ、瞬。」

血のつながらない、妹の結亜が、声をかけた。瞬が、傍にいないと、学校に行かないと、すねて、瞬を、困らせた。瞬の、傍から、離れようとしなない。学校でも、血の？がらなないと、いう事をしらない友達との間でも、恋人同士とからかわれていた。それが、結亜には、嬉しかった。友達からも、かっこいいと、認められている瞬を、自分にものにしたかった。

「学校の話だけど・・・」

結亜は、離れた土地の、大学に行くよう親に、言われていた。

「大学には、行かないで、働こうと思っているの」

「どうして？」

「だって、瞬と、離れたくない」

「どうするの？」

「ここから、通える専門に行く」

「だめだよ」

「やだ」

「将来の事は、きちんと、考えて」

「考えてる。ここから、十分に、通える。瞬と、離れたくない。大学行けて、言うなら、瞬も、一緒に、来て！」

結亜は、離れまいと必死だ。

「あたしと、いた方が幸せになれるよ・・・」

花梨の事だろう。

「あたし、知ってるの。あの人の、せいで、小さな子供の、お母さんが、自殺したって。」

「どうして、それを！」

「なんだって、お兄ちゃんの事なら、知りたいから。」

瞬が、激怒して、手を上げそうに、なるのを、結亜は、感じたが負

けなかった。

「そんなの。ダメだよ！パパもママも、許さないから！そんな・・・
あっ・・・」

結亜は、小さく悲鳴をあげた。瞬が、ついに、手を上げたのだ。熱くなる頬を、押さえ、涙が、零れてくるのを、必死に、こらえる結亜。わざと、怒らせたのだ。瞬の、花梨への、気持ちを、確認するかのように・・・。

「瞬・・・」

ぼろっと、涙が、こぼれるのをみて、瞬は、はっとした。

「ばか。」

そいいうと、結亜は、部屋を、飛び出していった。

「ちよっと！」

あわてて、追いかける瞬。その時だった。キッチンの、カウンターに、置かれた瞬の、携帯が、なり続けていた。

これも、運命。

運命に、この恋を任せてみよう、と思った事は、ないだろうか……。このまま、成り行きに任せて……。瞬は、外に出た結亜を、追いかけて行き、無事、連れ戻すことが、出来た。携帯の着信は、花梨からの、電話が、あった事を、知らせていたが、戻ってきた結亜が、それを、いち早く、見つけ、消去した。

「あなたに、瞬は、渡さない。」

激しい嫉妬が、結亜には、あった。何事も、なかったように、結亜は、瞬に、声をかけ

「お茶にしよう」

「ああ……。」

瞬に、お茶の用意をするのだった。

花梨の、運命が、少しずつ、廻っていった。

「花梨！電話が鳴ってるみたいだけど……。」

母親に言われて、あわてて、電話をとった。

「瞬？」

期待したが、別の声だった。

「ごめん……。」

あつ……。忘れた筈の声だった。

「諒……。」

諒からだった。出ないいつもの電話に出てしまった。

「かけるつもりは、なかったんだけど……。」

諒の、声は小さかった。

「お願いがあるんだ」

「なに？」

花梨は、警戒した。

「俺の事では、ないんだ……。颯太の事なんだけど……。」

諒には、4歳になる男の子がいる。花梨と諒が、別れる原因になった綾と諒の、子供だ。

「君に、相談するべきか……。悩んだ。だけど、頼めるのは、君しかないんだ。」

「どういう事？あたしに、頼もうつていうの？」

恋敵だった人の子供……。

「花梨……。綾の事を、許せないのは、判ってる……。俺の事も……。だけど、颯太は、何も知らない。」

「そうよ。子供に、罪はないわ」

「花梨。颯太は、綾の子供でもあるけど、俺の子供でもある。君にしか、頼めないんだ」

切なげな声。

「情けないよ……。」

「何があつたの。」

醒めた声。

「颯太が、入院した。拒食症なんだ。母親の事が、よほど、ショックだったらしい」

「だったら、余計、あたしでは、マズイでしょう！」

「だから、お願いしたい。颯太を、助けてほしい。母親が、必要なんだ」

「諒……。あたし達、終わったんだよ」

「俺との関係が続けると、言ってるのではないんだ。颯太の症状が、落ち着くまで、傍にいてほしい。

助けてやってくれ」

「子供を、ダシに使うなんて……。」

「情けないよ……。男では、どうしようにもない事があるんだ」
花梨は、迷った。何回か、遠くから、親子でいる諒と颯太を、見た事がある。諒に、よく似たかわいい男の子だった。もしかしたら、自分が、産んでいたかもしれない諒の子。諒の言つとおり、子供に罪はない。

「今、どうしているの？」

「病院にいる。母親を、恋しがってね。俺達の、両親は、遠くにいるから、そんなに、引き止めてもおけないし……。」

俺達という言葉が、胸に突き刺さる。

「わかった。明日……。様子を、見に行ってみる。」

「本当か！」

「ちよっと、だけ」

思いの他、明るい声の諒に、少しだけ、嬉しくなった。

「助かる。颯太も、喜ぶよ」

「だと、いいんだけど」

諒の喜ぶ声に、嬉しく思う自分に、驚く花梨だった。

小さな犠牲者。

病室を、覗くと、颯太は、眠っているようだった。何本もの、細いチューブが、小さな子供の体に、いくつも、ささっていた。点滴を、受けているようである。今は、泣きつかれて、眠っていた。何日か前の、花梨と、同じだった。この小さな体で、母親の死を、受け止めていた。小さいながらに、父親を、気遣い、元気にしていたようだが、体は、嘘をつけなかった。食欲を、次第に、失い、何も、出来ず、ただの、生きる屍と化していた。幼稚園の、担任も、虐待を、疑ったほどだった。

「こおいう訳なんだ」

諒は、生気のない顔で言った。いつもの諒とは、違い、一人の父親の顔になっていた。

「まだ、小さいのに、無理をさせてしまった。こんなに、小さいのに、俺の事心配してくれているんだな……。」

「諒。こうしてみると……。」

花梨は、大きな罪の意識に、襲われていた。

「あたしたち……。本当に、いけない事をしてきたのね……。」

「いけない事？」

「そうよ」

「二人共、自分の気持ちに正直すぎただけだ……。」

「こんな事になるなんて……。」

颯太は、諒に、似ていた。自分が、産みたかった諒に似た子供。

「あたしが、ついていくから、諒は、そろそろ仕事に戻って、いいわよ」

「一人で、大丈夫なの？」

「一人で、十分だから」

諒と、一緒にいり所を、他の人に、見られなくなかった。今は、独身になった諒でも、余計な事を、言われなくなかった。

「じゃあ、願います」

諒は、名残惜しい表情を、すると、部屋から、出て行った。後は、花梨だけが、一人になった。部屋には、他に、子供達が、何名か、眠っていた。他の、親たちは、売店にでも、行っているのだろうか。昼下がりの、眠くなりそうな時間だった。

「あら！」

背後で、声がした。同じへ部屋の、親だろうか、片手に、飲み物をかかえていた。

「颯太君の？」

「ああ・・・」

お母さん？と、言われそうになって、あわてて

「叔母です」

と、否定した。

「ああ・・・。そうなの？ひどく、お母さんを、恋しがって、泣いていたから・・・。入院しているって、聞いていたものだから。」

「ええ・・・」

面倒くさそうに、相槌をうった。

「ちよっと、長くなりそうなので・・・」

会話に、気付いたのか、颯太が、目を覚ました。

「ママ？」

「こんにちは！」

花梨は、颯太の顔を、覗きこんだ。

「誰？」

「ママの友達」

そっぴいながら、昔はね・・・と、心の中で、付け加えた。

「ママは？」

颯太は、まだ、母親の、死を、理解してなかった。

「まだ、入院しているの。まだ、これないから、代わりに、きたの。」

「ママに、逢いたい」

「そうね。」

花梨は、颯太の、頬を撫でていた。

「ママ・・・。」

颯太の、両目から、涙が、どっと、零れていた。周りに、気をつかい、声を押し殺し、泣き始めていた。

「こんなに、小さいのに・・・。」

花梨は、切ない気持ちで、いっぱいになった。自分達の、恋を、押し通した為の、小さな犠牲者が、目の前にいた。

花梨への、二つの思い。

瞬は、決断しようと、していた。今まで、何度も、花梨とは、すれ違ってきた。自分の、勇気が、無いために、欲しいものは、手に入らず、すり抜けて行ってしまう。

・・・花梨・・・

逢えないと思うと、辛い。諒を、見つめる花梨の顔を、見るより、逢えないほうが、辛い。一度、逢って、確認する事が、必要なんでは、ないだろうか・・・。その結果次第で、結亜に、ついて行こう。兄として・・・。

「なあ・・・。結亜。少しだけ、時間くれないか・・・。」

瞬は、志望校を、決めかねてる結亜に、声をかけた。

「時間て？」

「確かめたい事が、あるんだ」

「あの人の事？」

「あの人って、どうして、わかるんだ？」

「・・・消したから」

「何を？」

瞬は、自分の、携帯をみた。

「結亜・・・。」

花梨のアドレスが、消えていた。あったであろう、履歴さえも・・・。

「お兄ちゃん・・・。だめだよ・・・。」

「なんでだよ」

「あの人では、幸せになれない」

「結亜には、わからないだろう？」

「わかるの。」

「どうして？」

「お兄ちゃん。あのひと、逢った後は、幸せそうな顔してないもの。」

「・・・」

瞬は、言葉を、失った。確かに、花梨との事で、悩みあぐねる事が多く、塞ぎこむ事があった。結亜は、事細やかに、見ていたのだ。

「だから・・・。応援できない」

「・・・でも。結亜。一緒にいるだけで、俺。幸せなんだ」

「ダメ。ダメなの。行くんだったら、許さない。」

思春期の結亜は、必死だ。

「お兄ちゃん。居なくなるなら・・・。あたし。。居なくなるから。」

絶対。許さないから」

「そんな事、言うなよ・・・。」

瞬は、結亜を、落着かせるために、抱きしめた。

「ごめんな。結亜。可愛い妹なんだ。ずっと。最初に、逢ったときから」

言い聞かせるように、話しかけた。

「妹でも、いい。そばに、居て欲しいの」

結亜は、呟いた。

「瞬だけが、あたしの、家族なの」

「・・・絶対。離さない・・・」

結亜は、瞬の腕に、しがみつくのだった。

「こんな、小さな子を、残して、綾は、どんな気持ちだったんだろう・・・。」

何度か、颯太に、顔を出すうちに、花梨の、気持ちは、少しずつ、変わって行った。綾への、自分の、大切な人を、とられた怒りよりも、小さな子を、残して死んでしまった哀れみや、申し訳無さが、

先だっていた。そして、何よりも、母親を、恋しがる颯太は、次第に、花梨に、なついていき、花梨も、颯太を、この上なく、可愛がった。

「お姉ちゃん、まだ？」

花梨の、来るのが、遅れた日は、何度も、部屋にくる看護士達に、聞いていた。母親に、逢いたい。だが、母親は、あいに来ない。何かあったのかも、しれない。颯太は、不安がったが、花梨が、優しくさす事で、納得していた。

「パパより、お姉ちゃんがいいんだね」

周りは、花梨が、来ると、そういつて、笑った。

「どうやら、そうらしいな」

花梨と、颯太が、仲良く話しているのを、見ると、諒は、嬉しそうに、目を、細めた。

・・・花梨と颯太が、仲良いのは、嬉しい。もしかしたら・・・

諒は、考えていた。もう、昔に、諦めてしまった事を。今なら、許されるのでは、ないか。颯太には、折を、みて、綾の事は、話そうと思っていた。そして、花梨の事も、話そう・・・。

・・・結婚しよう・・・

何年か、前に、花梨に、用意していたプロポーズ。諒は、真剣にかんがえていた。

プロポーズの約束。

自宅に、帰ったのは、少し、遅くなっていた。

「食事は？」

花梨の母親が、声をかけた。あの日……。颯太の母親が、命を経つてから、ずーっと、花梨は、実家の世話になっていた。今日も、すっかり、颯太が、離してくれず、帰るのが、遅くなっていた。

「うん。軽く、済ませてきた」

病院で、颯太と諒と、パンを、食べてきた。諒は、メロンパンが、好きで、よく、買って食べる事が、多かった。昔みたいだ……。花梨は、思っていた。向かい合って、食べていると、付き合っていた頃に、戻っていったようだった。二人の間には、小さな、諒に、そっくりの、男の子が、増えてしまったけど。

「明日、退院だね……。」

花梨は、颯太に、微笑んだ。

「うん。あのさ……。お願いがあるんだ……。」

颯太が、かわいらしい声を立てた。

「ママはね。ずーっと、遠い所に行って、これないんだって。だから……。来て欲しいの」

「ちゃーんと、言うんだぞ」

諒が、脇から、口を挟んだ。

「来てね」

照れながら、颯太が、言った。

「明日、退院する時、きてね。待ってるから。」

次第に、花梨に、懐いてくる颯太が、愛おしい。

「お姉ちゃんにきてほしいの。パパも、来て欲しいって」

「コラッ！」

颯太は、笑い声を、立てながら、元気よく、立ち去った。照れながら笑う諒と、花梨の、目線が、逢ってしまった。

「そういう事なんだ……。」

諒は、言った。

「明日、ご飯食べに行かないか？」

花梨が、ふと、困惑した顔を、すると、

「いや……。颯太が、どうしてもって……。ね。」

と、ごまかした。どうしたものか……。花梨は、悩みながら、帰宅したのだった。

「花梨！」

思い悩んでいると、奥で、母親が、また、騒いでいた。

「お客さんだよ」

声を、する方を、振向く間もなく、目の前に、懐かしい見慣れた顔が、現れた。瞬だった。

「ごめん。よく、知った家だったから」

「どうしたの？突然」

今まで、連絡しても、何の、返事もなかったのに……。と、言いかけた。

「携帯から……。花梨の、履歴が、消えていて……。」

聞こえたかのように、言い訳した。

「連絡できないから。直接きた。」

急いで来た様子だった。

「どうしても、話しなきゃと、思って」

「何を？」

とにかく、家族に、話を、聞かれないと、思って、花梨は、部屋奥に、瞬を、連れて行った。

「考えたんだ……。このままでは、駄目になる……。」

瞬は、いつになく、真剣だった。

「考えて欲しい。俺と、結婚してほしい」

「えっ！」

花梨は、思わず、声を、あげた。

「瞬。どうしたの？そんな急に？」

「急じゃない。ずっと、考えていた。必要なんだ。花梨が、俺を必要なんじゃなくて、俺が花梨を、必要なんだって、気付いた。一緒に居たいって。」

「ちよつと……。」

嬉しかった。いろいろ、諒との事を、聞かれるだけだと、思っていた。無条件に、必要としてくれる瞬の、気持ち、心の底から、嬉しかった。

「いいの？あたしで……。」

「傍にいたい」

「うん」

花梨を、瞬は、そつと、抱きしめた。柔らかい暖かい香りが、した。「ずーっと。言いたかったんだ。初めて、逢ったときから……。」

プロポーズは、もつと、違う場所で、したかったんだけどね」

「じゃあ……。もう、一度、そこで、して。」

甘えた声を、出した。

「いいよ。新しく出来た天文台の、傍に、公園が、あるんだ。そこで……。」

「いつ？」

「7月。七夕にしたい」

「うん。もうすぐ、だね」

「うん」

花梨は、瞬の胸に、顔をうずめた。この時、明日の約束など、花梨の頭には、なかった。

愛おしい人は、瞬。

「起きなきゃ。」

手を、伸ばす所にある筈の時計を瞬が、イタズラをして、遠くへ、置いた。

「もう！こんな時間じゃん！」

時計は、もう昼すぎを、示していた。花梨の実家の、部屋だった。昨夜は、あのまま、瞬が、花梨の部屋に、泊まりこんでいた。瞬からの、正式ではない、プロポーズとは、いえ、結婚の約束に、花梨の両親は、うかれた。浴びるほどの酒を、花梨の父親は、飲ませ、瞬を、つぶしにかかった。

「結局、つぶれなかったけどね。」

瞬が、隣で笑っていた。

「何か、用事があったの？」

あわてている様子の、花梨をみて、瞬が言った。

「そうなの！」

花梨は、思い出した。すっかり、浮かれていて、忘れていた。今日は、颯太の、退院する日なのだ。10時くらいには、行く約束をしていた。あわてて、携帯を、見ると、何度も、着信を、知らせるLEDが、点滅していた。

「ああ……。まずった」

花梨は、頭を、クチャクチャにした。

「大切な仕事でも？」

瞬が、覗き込もうとした。

「逢わなきゃ、いけない子がいたの。おくれちゃた……。」

諒の子供である事は、言えなかった。そのうち、また、携帯が、着信を、知らせた。

「はい。」

花梨は、すぐ出た。

時間が、来ても、花梨は、現れなかった。颯太は、諒の用意した私服に、着替え、病室の中を行ったり来たりしながら、花梨が、来るのを、今か今かと、待っていた。最初は、ゲーム等をして、気を、紛らわせていたが、だんだん、半泣きになっていった。

「お姉ちゃんは？」

諒に聞いた。

「うん」

不安になっていた。颯太が、いれば、花梨は、必ず来ると、思っていた。だが、思いに反し、花梨は、来ない。何度か、携帯に連絡をとっても、応答は、なかった。

「そろそろ・・・行こうか？」

「やだ！お姉ちゃん。来るまで、待つ」

颯太が、ダダをこねた。

「じゃあ、もう一度だけ。」

電話して、出なかつたら、諦めて、帰る。諒は、そう決めて、花梨に、電話した。

「はい。」

何度目かで、花梨が、出た。

「俺だけど・・・。」

「ごめん。起きれなくて」

花梨は、瞬の隣で、応えた。

「お姉ちゃん？」

電話口に、颯太が出た。

「どうしたの？待ってるのに・・・。」

「ごめん。寝坊しちゃった。」

隣で瞬が、吹き出した。

「まだ、間に合う？」

花梨は、颯太に逢いたいと思った。

「お姉ちゃん。来るまで、待ってる。」

「じゃあ。行こうかな？」

瞬を、見ると、何も知らないせいか、行って来いと、目で合図した。
「今から、行くから、待ってて」

「うん」

颯太は、諒に、替わらないまま、携帯を切った。

「お姉ちゃん。来るって！」

明るい表情で、諒に応えた。

「そっか」

ほっと、した顔をする諒。子供にかこつけ、花梨に逢える事を、喜んでるのは、諒自身だった。

「行くの？」

瞬が、聞いた。

「顔出したら、戻ってくる」

「すぐ？」

「うん」

花梨は、髪を梳かしながら、笑顔で応えた。

「俺も、もう、帰るけど」

「わかった。じゃあ、用が、済んだら、メールする」

「うん」

瞬は、花梨を、抱き寄せ、頬に、触れた。

「本当に、結婚しような」

「うん」

「約束」

帰ったら、結亜に話そう……。一緒に、行く事は、出来ないという事を。花梨と、結婚するという事を、おそらく、彼女は、反対し、何をしてくすかは、わからない。それでも、説得し、認めてもらおう。

う。花梨の事は、ずっと見ていた。自分に、必要なのは、花梨以外に、いないという事を、伝えるつもりだった。

「じゅあ、後で」

瞬の、笑顔だった。すぐ、その笑顔を、みる事が、出来ると、花梨は、思っていた。大切な人。諒より、瞬が、大切であるという事を、この後、思い知る事になる。

あの時のプロポーズ

「待ってた!」

病院のロビーに入ると、駆けってきたのは、颯太だった。花梨の、首に、思いつきり、飛びついてきた。

「颯太君……」

「待ってたんだよ!僕」

花梨の肩に、顔を、うずめていた。花梨の、甘い香りが、颯太の鼻腔を、くすぐった。

「こないんじゃないかと、思ってた……」

半分、泣き声だ。

「ごめん……」

つい、さっきまで、瞬と、一緒だったなんて、言えない。

「こいつ……。ずっと、待ってたんだ。」

照れ笑いしながら、颯太の、父親諒が、歩み寄ってきた。

「本当。もう、こないかと、思っていたみたいだ。」

諒まで、そう、思っていたようだ。少し、寂しいそうに、呟いた。

「飯……。くらい、一緒に、たべれるんだろう?」

「ん……。早く、帰りたいんだけど。」

瞬が、待っている。そう言いたかった。

「話したい事が、あるんだ」

颯太を、抱きかかえた花梨に、諒は、真剣な眼差しで、告げた。

「どうしても、言いたい。」

諒は、花梨の手から、颯太を、抱えようとしたが、颯太は、抵抗した。

「だいぶ……。颯太は、君に、なついてしまったようだ……」

「諒は、ふっと、笑った。」

「本当は、あの日に、君に、言うべきだった言葉を、言いたい」

花梨の顔色が、変わった。

「待つて！今は、聞けない」

驚いた顔をしたのは、諒だは、なかった。

「どうして？」

颯太が、父親の、これからするプロポーズを、察して、いたのだが、断ろうとする花梨の、気配を感じたのか、顔をあげた。

「どうして？僕の、ママになってくれないの？」

昨夜、花梨の、帰った後、諒から、男同士の相談として、颯太は、綾の事を、聞かされていた。そして、これから、花梨と、一緒に生きて行きたいという父親、諒の考えに、颯太も、賛成していた。幼い颯太は、花梨に、母親の影を重ねていた。何も知らないとは、いえ、子供は、無邪気なのだ。

「ねえ……。」

颯太は。花梨の腕から、滑り落ち、見上げた。

「一緒にいてほしいのに……。」

「颯太君……。」

花梨は、口ごもった。

「あの……。」

なんて、言おう。こんな小さい子供に……。

「ごめん」

花梨は、いえなかった。

「バカ！」

颯太は、そう言い捨てると、前も見ずに、病院のロビーを、駆け出した。1階の、ホールである。混んでいるとは、いえ、このまま、飛び出したら、車の、往來の多い、大通りまで、すぐである。

「ちよつと！」

花梨と、諒は、追いかけた。病院の、ホールは、混んでいて、小さい子供のように、すり抜けていくのは、困難である。花梨は、脚の早い諒に、すぐ、置いていかれ、颯太を、追うのは、諒だけに、なかった。

「諒！」

颯太君を、引き止めて！願いを、こめながら、2人の後を追いかけて、中央出口を、くぐる時、人々の、悲鳴が、花梨の、耳に届いた。

「嘘……。」

何人かの、人が、集まっていた。

「誰か、先生を、呼んで！」

怒鳴り声がして、何人かの、人が、病院に、戻っていた。ホールを出ると、タクシー乗り場が、すぐある。その脇に、バスプール。颯太は、真っ直ぐ、タクシー乗り場を、すりぬけ、よく、綾と、病院に来ていた時、そうであったように、バスプールへ、向かおうと、横切ったのだった。

「そんな……。」

恐る恐る、近寄ると、人ゴミの中に、小さく動く影を、見つけた。

「颯太君？」

颯太だった。

「お姉ちゃん？」

花梨の、姿を、遠くから、みつけた途端、顔が、大きく歪んだ。

「パパが……。」

みりみる真っ赤になり、その姿は、また、人の波に、消えた。人々の足の、影から、セダンの、車の下に、横たわる人の影が見えた。見覚えのあるシャツを、着ていた。

「諒？」

諒のシャツが、車の下から、見えた。慌てて、人ごみを、掻き分け、中に入る花梨。もう、意識が、混濁していて、状況が、見えなくなっていた。

「諒！」

ただ、ひたすら、諒の名を、呼んでいた。聞き覚えのある子供の泣き声が、耳についた。

「僕が……。」

後は、言葉にならない。誰かが、叫んでいた。

「子供を、かばって、ひかれたんだ。子供は、転んだだけで、すんだが・・・。」
車の、下からは、紅いどろっと、したものが、流れ、広がっていた。

命の火。

ひとつ、ひとつの出来事が、スローモーションのごとく、目に映っていた。意識が、しっかりしていたのは、泣きじゃくる颯太が、居たから。颯太を、守らなきゃと、いう気持ちで、働き、今、目の前で、起きている事を、冷静に、受け止め、目の当たりにしていた。「お姉ちゃん……。」

「大丈夫だから」

それは、願い。大丈夫であってほしいという。これ以上、この子が、親を失うという事実は、あつては、ならない。それは、自分が、関わってしまったという、責任かもしれない。そう、思いながら、花梨は、目の前で、くり広がる出来事を、テレビでも、観賞するかのように、見ていた。シャツの、持ち主は、やはり、諒だった。飛び出した颯太を、追いかけて、車に、衝突しかけた、颯太を、かばい、諒が、犠牲になった。息は、あるのか……。その場に、駆けつけた医師達に、人工呼吸を施され、運び込まれたタンカーに、乗せられた。

「家族の方！」

事務服を、来た男性に、声を、かけられ、花梨は、抵抗なく、救命室脇の、ソファーに、座らせられた。

……。何度、この、ソファーに、座っただろう……。

呆然としながら、目の前の、時計を見ていた。

「最善を尽くします」

もう、一人の医師から、説明を、聞かされたが、気持ちは、何処かに行っていた。一瞬のうちに、いろんな事が、起きてしまい、感覚が、麻痺していた。周りは、白濁して、現実には、起きている事とは思えない。

……。今、諒の、命は、消えようとしている……。

思えば、諒との、出逢いは、以外だった。まさか、自分達が、付き

合う事になるとは、思えなかった。

諒の事を、気にする女性は、何人かいたが、花梨は、眼中になかった。たまたま、会社の、イベントで、外出する際、突然、諒に、お弁当作りを、頼まれたのが、キツカケだった。

「そうだったよね。」

花梨は、思い出し、ふっと、鼻で笑った。諒との、思い出が、こんなに、あるなんて。自分は、諒とは、終わったつもりでいた。瞬が、好き。瞬と、いると、心が、安らぐ。でも、どうして、こんなに、諒との、思い出に縛られるんだろう。

「お姉ちゃん」

颯太が、伸び上がって、花梨の、両目から、あふれ出る涙を、ふき取った。自分でも、意識してなかったが、涙が、零れ落ちていた。諒の、事を、思うと、苦しい。

「ごめん……。」

花梨は、うつむいた。本当なら、自分が、颯太を、慰めなきゃならないのに……。

「本当。ごめんね。」

諒が……。諒拳を、握り締めた。

……。結婚しよう……。

何年も前に、待ちわびていた言葉を、言ってくれたのに、今、彼の、命の、火は、消えようとしていた。

「諒」

自分が、一番、失いたくないのは……。その答えを出したら、諒の、命は、助かるのだろうか……。花梨の、心は、かき乱れた。

愛おしい妹よ。

「真剣なんだ」

瞬は、結亜に告げた。どうしても、話したくないという結亜を、無理に、座らせ、いつになく、真剣な面持ちで、結亜に、向かいあった。

「認めないって、言ったでしょう？」

結亜は、強気だ。それは、長い間、一緒に居たという長い時間を、共有したという者が、持つ自身だった。

「だとしても、結亜。君とは、一緒にいても、伴侶には、なれないんだ」

「それでも、いい。一緒に、居られれば」

「俺は、ダメだ。君は、妹なんだ。妹として、幸せになってほしい。」

「あたしは、瞬に、幸せにしてほしいの」

「無理だ」

「じゃあ！」

結亜は。キッチンに走った。

「あたし、死ぬから！」

取り出したのは、ナイフだった。

「瞬が、全てなの。誰にも、渡したくないの。瞬が、居なくなるなら、あたしは、生きていられない」

「結亜。やめろ！」

瞬は、結亜に、近づいた。

「今は、俺しか、見えないかもしれないが、きっと、好きになる人が、出来る。まだ、お前には、わからないんだ。」

「だから……。それまで、一緒にいてほしいの」

結亜は、ナイフを、逆立て、額下に、突き立てるマネをした。

「一人にしないで」

「結亜……。」

瞬は、切ない顔をした。

「大切だよ。結亜。君だって、大切なんだ」

少しずつ、距離を縮めた。

「結亜。抱きしめたいよ」

瞬が、腕を伸ばし、ナイフを、取ろうとした時、結亜は、抵抗した。自分の、喉下を、めがけていた、歯先が、瞬の妨害を、うけ、的を外した。歯先が、大きく、ズレ、結亜は、自分の、左頬を、深く切り裂いて島田。

「ぎゃっ！」

「結亜！」

結亜は、恐ろしい悲鳴をあげた。物凄い血量が、吹き上げていく。結亜の手から、ナイフを、取り損ね、逆に、深く傷を、負わせてしまった。

「痛い！顔が……。痛い！瞬！」

両手で、顔を、押さえ、苦悶する結亜。

「結亜！」

来ていたシャツを、脱ぐと、結亜の顔に当てて、止血しようとした。顔からの、出血は、物凄く、止まらない。

「待ってる！今、救急車を、呼ぶから」

瞬は、血だらけの、手で。携帯を、かけていた。

「結亜。なんて事に」

血だらけの、手が、震えていた。

星月夜に、贈る思い。

時間が、経っていった。どれくらい、経っていったのだろう。颯太に、慰められ、花梨も、いつの間にか、眠っていた。人の気配に、目を覚ますと、青いマスクをした手術を、済ませたらしき医師が、目の前に立っていた。

「あの……。」

しつかりしなきゃ……。花梨は、思い、寝ぼけた顔を叩いた。

「どうだったんですか？」

「とりあえず……。一命は、取り留める事は、できました」

一命は。と、聞いて、少し、ほっとしたのか、立ち上がっていた膝の力が、抜けた。

「でも……。脊髄を、損傷していて……。良くなっても、もう、ご自分の足で、歩くことは……。」

「！」

颯太は、まだ、眠っていた。自分の脇の、ソファで、体を、横たえ、気持ちよさそうに、眠っていた。この話は、颯太に、聞かせたくない。颯太は、パパとサッカーをするのが、好きだと言っていた。助かったとはいえ、もう、一緒に、遊べないなんて……。話は、まだ、続いていた。

「以前。油断できない状況です。」

間近で、轢かれたのに、助かったのは、奇跡的だった。このまま、ICUになると、聞かされたので、花梨は、面会も出来ないまま、颯太を、連れて、実家に、帰る事にした。星が、空一杯に、広がっていた。どこまでも、どこまでも……。こんなに、街中で、星を、綺麗に見たのは、何で、久しぶりなんだろう……。花梨は、寝ぼける颯太を、背負い、病院の、玄関外で、空を、見上げた。静かな夜だ。もう、あんなに、いた人達が、いない。お昼前に、病院に、駆けつけてから、なんて、時間が、たっていたんだろう……。も

う、何年も、たってしまっただよな気さえした。手術が、終わるまで、あの病院で、何年も経ち、自分も、周りも、過去の、人間のよくな気さえしてきた。青い空に、広がる星は、無数で、月さえ、冴え冴えとし、美しかった。

「もう、少しだから・・・。」

背中、颯太に、声を、かけ、花梨は、タクシーに、乗り込んだ。星も、月も、美しい。

「諒・・・。」

胸が、痛んだ。何か、特別な夜の、ような気がしてきた。ここに、今、自分は、生かされている。

とめどもなく、涙が、零れてきた。

携帯が、なった。

「花梨？」

瞬から、だった。

「今・・・。あたしも、しようと思っていたの。」

何から、話せばいいんだろう。自分に、起きたこと？それとも、これからの事？心は、乱れているはずなのに、異様に、静寂だった。

冷静だった。今夜の、月を、映した湖の、湖面のように、静かな心。

「何から、話したらいいか・・・。」

花梨は、寂しいそうに、笑った。

「花梨。」

瞬の、声は、花梨の寂しい笑い方で、何があったか、察したようだった。暖かく、落ち着いた声。大好きな瞬。

「逢えなくなっただ。」

感情を、抑えた瞬の声。

「何か、あったのね。」

予測できた。結亜が、黙って、自分の事を、認める訳がない。昨日までだったら、責めただろう・・・。どうして？何があったの？つて。でも、今、自分は、瞬を、責める事は、できない。

「最後まで、一緒にいたいと思っていた」

瞬の声が、涙ぐんでいた。本当に、心の奥底から、花梨を、愛していた。その声だ。

「あたしも……。」

何も、言えない。責めない花梨に、瞬も、花梨に、何があったかを、察した。

「ずーっと、一緒にいたいと、思っていた。嘘じゃないの。」

そこまで、言うと、二人は、お互いの息使いを、確認するかのように、黙り込んだ。

「一緒に、居れなくなった……。」

ぼそっと、静寂を、破って瞬が言った。

「傍に、居なきゃならない人が、できた」

辛そうだった。好きで、一緒にいるんじゃない。そう、告げているように、感じた。

「そう……。」

携帯の、向こうで、瞬が、泣いていた。

「あたしも……。ごめん」

この、状況で、引き止める事ができようか……。自分を、愛してくれと、瞬に、言えるだろうか……。諒と、颯太から、今、離れる事は、出来ない。所詮、瞬とは、一緒になれないんだ……。

「花梨……。」

「なあに？」

「星。綺麗だな……。」

花梨は、タクシーの、窓から、外を、見た。

「うん。」

「あの時見た、星みたいだな」

「うん」

涙が、止まらない……。あの時、瞬が、まだ、学生だった時に、2人抜け出して、見にいった夜景を、思い出していた。忘れられない若すぎた夜。

「お願いがあるんだ……。」

瞬が、小さい声で言った。

「いつか．．．。いつか、逢おうな。」

「そうね。いつか、また、逢えるわよね」

「今まで、そうだったからな」

「うん」

「じゃ．．．。」

「じゃ．．．。」

2人は、お互いが、先に、携帯を、切るのを、待った。

「先に、切ってよ．．。」

花梨が、笑っていった。

「だな．．。」

瞬が、笑った。

「じゃ．．．。花梨？」

「うん？」

「愛してる。」

そう言って、瞬からの携帯は、切れた。

「．．．。」

携帯を、みつめ、花梨は、長いため息をついた。青い夜空に、冴え冴えとした月の光だけが、冷たく光っていた。

白いバラが、招く出会い。

結亜は、通路側から、そつと、中を覗き込んで見た。通りに、面した花屋の、シヨウウインドーには、季節の花が、いろいろアレンジされて、飾られていた。

「こんな所に、花屋が出来たんだ。」

結亜の通う形成外科の入る病院の、1階に、新しくこ洒落た花屋が出来ていた。

「1年前は、なんにも、なかったのに・・・。」

出来て、1周年を、知らせるボードが、出ていた。あれから・・・。結亜が、自らを傷付けようとしたナイフで、左顔を、怪我した日から、1年が、経過していた。あの日、結亜は、自分の顔と、引き換えに、瞬を得た。瞬は、自分の責任を感じ、結亜に寄り添い、一緒に生活していた。結亜は、別の地で、大学へ、通う事を提案したが、それだけは、瞬が、拒否した。

・・・地元の、大学に通ってほしい・・・

瞬が、傍にいるならと、結亜は、承諾した。傷は、かなり、良くなったものの、化粧しても、なんとなく、わかってしまう程度に、なっていた。

「気に入ったの、ありました?」

店の中から、声がかかった。

「あつ・・・!」

思わず、いつものクセで、片手で、左手で顔を隠した。

「ああ・・・」

近寄ってきた店員が、結亜の顔をみて、微笑んだ。

「もしかして・・・?」

結亜も、店員の顔に、見覚えがあった。

「大翔君?」

花屋の店員の顔に、見覚えがあった。同じゼミの子で、いつも、女

の子達に、囲まれている。ちょっと、花とは、縁遠い感じの子だった。

「どうして？」

結亜は、顔を隠す事を、忘れた。

「ああ……。姉貴の、店なんだ。姉貴……。これでさー！」

大翔と、呼ばれた子は、手で、お腹を、大きく表現した。

「何か、気にいった花が、あった？」

大翔の、笑顔が、まぶしくて、思わず、傷を、思い出し、手で触れてしまった。

「傷？」

怪訝な顔をした。

「そうなの。あたしの不注意なんだけど……。」

「ああ……。そうだったんだ！」

大翔は、笑った。

「左頬を、よく、隠していたから、何かあるのかと、思っていたんだ。傷？だったんだ」

「うん……。」

「気にしているの？」

結亜は、頷いた。

「そんな……。目立たないけどな……。俺、左頬ばかり、ついていたから、クセなんだとばかり、思っていた。」

「そんなに、見ていたの？」

「いや……。ハハ」

大翔は、照れるように、背を、向けた。

「今日さ……。たくさん。バラの花を、買ってくれた母子がいてさ……。もう、これしか、残ってないんだけど。」

大翔は、白いバラを、差し出した。

「サービス」

「ええ？」

結亜は、後退した。

「当分。ここの花屋。手伝つてると思うんだ……。今度きたら、好きな花渡せると思う。病院、まだ、通つてるの？」

「月に、1回くらいかな……。」

「それじゃあ、間空きすぎるね」

意味ありげに、大翔は、結亜に、渡すバラに、小さなリボンを、付けるのだった。

君思う夜に。

「ママ・・・。早く」

「もう。ダメ」

颯太の、脚は、早い。追いつくのは、やっとだ。花梨は、息をきらせながら、坂を、上りあがり、墓地にたどり着いた。

「だって、ママは、花束を、持つてるんだから、颯太とは、違うの。」

抱えきれない白いバラの花束を、花梨は、墓前に供えた。

「もう、1ヶ月経つのね・・・。」

花梨は、缶コーヒーを、供えた。

「颯太ったら、自分で、パパの、お墓に、お花を供えるって言うってた癖に・・・。」

墓前に、小さく座っている颯太を、見ると、颯太は、小さな手を、合せて、何か呟いていた。

「何を、言ってるの？」

「うん・・・。」

颯太は、花梨を、見上げた。

「パパが、居なくなっても、ママがいるから、大丈夫だよって。」

「そう・・・。」

結局、諒は、完治する事なく、1ヶ月前に、逝ってしまった。最後まで、花梨は、諒の妻になる事は、なかったが、颯太を、迎え、家族として、暮らしていた。意識のある時に、花梨は、諒の、結婚の申し出を、受けようとした。だが、諒は、自分の先が、あまりない事を、感じ、結婚しようとは、2度と口にする事は、なかった。

「ごめんな・・・。結局、約束は、何も守れなかった。」

諒が、意識を失う前の言葉だった。

・・・何も、いらなかったのに・・・

花梨は、墓前のバラをみつめた。

・・・ただ、一緒にいらればいいと思っていた・

こんな簡単に、人は、死んでしまうのか。諒と一緒にいると幸せだった。そして、諒を、思う事で、幸せになり、そして、苦しみ、人を憎んだ。諒という人に、長い自分の、人生をかけていた。

「諒。颯太の事は、心配しないで」

颯太は、自分の、家族として、一緒に生活していくつもりだ。今まで、一緒に生活していない親戚に預けるには、あまりにも、可愛そうだ。

「ママは、なんて？話したの？」

颯太は、花梨を、ママと呼び、親しんでいる。この子を、これ以上、悲しませる事は、出来ない。

「颯太と一緒にいるからって」

「うん」

颯太は、花梨の、腕に抱きついた。

「ねえ。瞬。お願いがあるの。」

結亜は、キッチンで、コーヒーを入れている瞬に声をかけた。

「バイトを、頼まれたんだけど、力仕事なのよ」

最近、結亜は、上機嫌である。つい、この間は、白いバラを、もらってきたらしく、花瓶に生けていた。どうやら、他人に、もらったのか、大切に、花が終わってから、ドライフラワーに、して壁に飾っていた。大翔に逢ってから、1ヶ月、結亜の心は、瞬と、一緒に居る時には、得られなかった満足感でいっぱいだった。

「頼まれてくれない？」

「お前のバイトだろう？」

結亜は、通う病院の花屋で、バイトを始めていた。それが、どういういきさつなのか、瞬は、知らなかったが、次第に、明るく生き生

きとした結亜に、安心していった。

・・・あんな、傷があつては・・・

結亜の、左の頬についた傷に、瞬は、心を痛めていた。自分が、上手く、立ち回れなかった。結亜の、気の済むように、自分は、寄り添っていいこう。心に、決めていた。

「毎月、同じ日に、お花を、届けるんだけど、大翔が、腰を痛めて・・・。」

「大翔って？」

「あの・・・。バイト先の」

結亜が、少し、紅くなった。

「ふうん。」

瞬は、笑った。

「そういう事なら。」

「じゃあ、明日。ここの花屋に行つて。住所渡されるから。そこに届けるの」

結亜は、活気付いた。

「絶対よ」

ポカンとする瞬を、尻目に、メモを渡すと、忙しそうに、メールを打ち始めた。

「・・・たく。現金な奴だ・・・。」

瞬は、呆れながらも、結亜が、誰かの、お蔭で、幸せそうに、いるのを、感じていた。

・・・それで、いいんだ・・・

・・・いつか、お前も、恋をする・・・

そう、自分は言った。その時、結亜は、ありえないと言った。・・・が、今が、その時では、ないか。

結亜は、恋をし始めている。ようやく、その時が、来たのである。

・・・花梨・・・この広い星空のどこかに、いるのだろうか・・・。

噂で、元恋人の諒と、一緒にいると聞いた。それでも、逢いたいと、

思うのは、何故だろう・・・。
まだ・・・。花梨への、自分の思いは、終わっていない。あの日と
同じ星月夜の夜だった。

月夜の約束。

颯太も、最近は、すっかり、大人になったのか、生意気な事を言うようになった。

「今日は、ママ一人で行って来て」

毎月の諒の、月命日には、欠かさず、花を、捧げに来るのだが、今日は、行かないと言うのだ。

「お友達の家に行かなきゃなの」

颯太は、言った。

「来月は、行くからね」

舌足らずの口調で言った。

「この坂は、大嫌い！」

細い坂を、上らないと、墓地には、行けない。車も入れない。

・・・今日の、花の仕入れが、遅れたので、お届けします。・・・花屋の、青年に、笑顔で言われた。

・・・別に、そんな大した量でもないのに・・・

丁寧に、言われたので、甘える事にした。ちよつと、キツすぎる坂を、上りきった。

「諒？」

違う・・・墓前に、誰か居た。随分。見慣れた人。逢いたくても・・・どんなに、恋しくても、逢っちゃイケナイって、心に、封印した人。もう、2度と、人を、失うのは、嫌だと、心に決めた今。

「瞬！」

今、逢いたくて・・・ようやく、逢える。

「瞬！」

間違いないよね・・・心でも、叫んで、その人は、振り返った。
「！」

瞬は、驚いた。花屋で、渡されたのは、白い小さなバラを、大きく集めた花束だった。そう・・・1ヶ月前、結亜が、家に、持ち帰

ったのと、同じ。渡された地図を、頼りに、来ると、外人墓地の片隅にたどり着いた。ここで、指定された時間まで、人を待ち、渡して欲しいという花屋からの、依頼だった。

「誰に渡すんだい？」

怪訝がる瞬に、結亜は、笑顔だった。

「もう、あたしは、大丈夫だから」

「わかってるけど・・・。」

「そう。行つていいよ。瞬」

花屋のバイトと、笑いあう結亜に、瞬は、顔がほころんだ。

・・・邪魔だから、さっさと仕事に行けつてか・・・

意地悪な笑いをし、瞬は、一人の男の、名前がある墓地の、前に居た。

「諒・・・？」

それは、2ヶ月前に、命が尽きたのをしめすものだった。

「そうか・・・。亡くなっていたのか」

諒は、旅立ち。花梨は、どうしているんだろう・・・。懐かしい花梨。あれから、時間だけが流れていたが、何一つ、変わっていないかった。あの、別れを、告げた夜の、星月夜は、昨日のように、覚えてる。

あの日の記憶のまま、時間だけが、止まっていた。

「瞬！」

懐かしい声に、瞬は、振り返った。

「花梨・・・。」

そこに、逢いたくても、逢えずにいた人が、立っていた。

「どうして・・・。」

「俺も聞きたいよ」

瞬は、バラを抱えたまま、花梨に歩み寄った。

「やっと・・・。逢えた」

花梨は、そつと、瞬の、胸に触れた。

「本当なのね。」

「本當みただよ」

瞬は、花梨の肩に、腕を廻した。もう、花梨と、離れる事はない。絶対に。

「こんどこそ……。一緒に。」

「うん。」

「約束」

「うん」

白い小さなバラが、諒の墓前に、そっと、置かれた。来月から、また、同じ日に、この坂を、上る人が、増えるだろう。きっと、その中の元気なちいさな男の子は、よく通る声で、はしゃいでいるであろう……。

「早く！瞬。パパ」

まぶしそうな、日差しの中、新しい家族が、通り過ぎていくであろう。あの夜の、約束は、今度こそ、守られたのである。

・・・・・・・・・・・・・・・・END・・・・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1669j/>

続・月夜に贈ろう。

2010年10月14日17時35分発行